

ご じゅつ かわ

五十川遺跡

—— 第5・6・7・8次調査の概要 ——

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第720集

2002

福岡市教育委員会

ごじゅつかわ

五十川遺跡



調査番号 9757 9853 9837 9846
遺跡略号 GJK-5 GJK-6 GJK-7 GJK-8

2002

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区五十川二丁目地内の住宅建て替えに先立って実施した五十川遺跡群の第5～8次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代から中・近世の住居跡や建物跡、溝などの集落遺構が発見されました。なかでも中世末から近世の集落遺構は、矩形に巡る大溝の隅に陸橋状の出入り口が付設しており、「上屋敷、下屋敷」として残る字名を考えると五十川地域の歴史を解明する上で興味深い発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会が公用住宅の建替えに先立って、平成9（1997）年度と平成10（1998）年度に、福岡市南区五十川二丁目で緊急発掘調査した五上川遺跡群第5～8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 這構は、各調査区毎に記号化してその後に01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、第5次調査が宮井善朗、第6～8次調査は小林義彦と今村ひろ子が作成したが、製図については井上淳子、上納賀代子の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺模と遺物の写真は、第5次調査が宮井、第6～8次調査は小林が撮影した。
6. 本書の執筆は、IIの第5次調査を宮井、IとIII～Vの第6～8次調査を小林が担当し、編集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

I.	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織	1
3.	立地と歴史的環境	3
II.	第5次調査の記録	7
1.	調査にいたる経過	7
2.	調査体制	7
3.	調査の記録	7
4.	小 結	10
III.	第6次調査の記録	13
1.	調査にいたる経過	13
2.	調査体制	13
3.	調査の記録	13
1)	調査の概要	13
2)	建物跡	14
3)	土 壤	14
4)	その他の遺構と包含層出土の遺物	16
4.	小 結	16
IV.	第7次調査の記録	21
1.	調査にいたる経過	21
2.	調査体制	23
3.	調査の記録	23
1)	調査の概要	23
2)	建物跡	24
3)	土 壤	25
4)	溝遺構	29
5)	その他の遺構と包含層出土の遺物	33
4.	小 結	34
V.	第8次調査の記録	43
1.	調査にいたる経過	43
2.	調査体制	44
3.	調査の記録	44
1)	調査の概要	44
2)	土 壤	44
3)	その他の遺構と包含層出土の遺物	45
4.	小 結	45

挿図目次

F i g.	1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
F i g.	2	五十川遺跡群周辺地形図 (1/11,000)	4
F i g.	3	五十川遺跡群位置図 (1/8,000)	5
F i g.	4	五十川遺跡群第5~8次調査区周辺現況図 (1/1,000)	6
F i g.	5	第5次調査区遺構配置図 (1/100)	8
F i g.	6	第5次調査区位置図 (1/400)	8
F i g.	7	出土遺物実測図 (1/3)	10
F i g.	8	第6次調査区遺構配置図 (1/150)	13
F i g.	9	14号建物跡実測図 (1/60)	14

F i g. 1 0	2号土壤実測図(1/20)	14
F i g. 1 1	2号上塙出土遺物実測図(1/3)	15
F i g. 1 2	10・11号土壤実測図(1/30)	16
F i g. 1 3	包含層出土遺物実測図(1/3)	16
F i g. 1 4	第6・7次調査区位置図(1/500)	21
F i g. 1 5	第7次調査区遺構配置図(1/150)	22
F i g. 1 6	7号建物跡実測図(1/60)	23
F i g. 1 7	7号建物跡出土遺物実測図(1/3)	24
F i g. 1 8	3・4・6・8号土壤実測図(1/30)	26
F i g. 1 9	3・4号土壤出土遺物実測図(1/3)	27
F i g. 2 0	6号土壙出土遺物実測図(1/3・1/8)	27
F i g. 2 1	9・10・11号土壤実測図(1/40)	28
F i g. 2 2	10号土壤出土遺物実測図(1/3)	28
F i g. 2 3	1・5号溝土層断面図(1/40)	29
F i g. 2 4	1号溝出土遺物実測図(1/3)	30
F i g. 2 5	2号溝出土遺物実測図1(1/3)	31
F i g. 2 6	2号溝出土遺物実測図2(1/3・1/4)	32
F i g. 2 7	5号溝出土遺物実測図(1/3)	33
F i g. 2 8	13号溝出土遺物実測図(1/3)	33
F i g. 2 9	包含層出土遺物実測図(1/3)	34
F i g. 3 0	第5・8次調査区位置図(1/500)	43
F i g. 3 1	第8次調査区遺構配置図(1/100)	44
F i g. 3 2	1号土壤実測図(1/30)	44
F i g. 3 3	包含層出土遺物実測図(1/3)	45

図 版 目 次

P L. 1	(1) 第5次調査区全景(西より) (2) 溝5全景(西より)
P L. 2	(1) 溝5遺物出土状況(北より) (2) 溝2遺物出土状況(北より)
P L. 3	(1) 第6次調査区I区北側全景(北東より) (2) 第6次調査区I区南側全景(西より)
P L. 4	(1) 第6次調査区II区全景(北より) (2) 第6次調査区II区全景(南より)
P L. 5	(1) 第6次調査区14号建物跡全景(東より) (2) 第6次調査区2号上塙全景(西より)
P L. 6	(1) 第6次調査区10号土壤全景(南より) (2) 第6次調査区11号土壤全景(東より)
P L. 7	(1) 第7次調査区東側全景(南より) (2) 第7次調査区西側全景(南より)
P L. 8	(1) 第7次調査区7号建物跡全景(北より) (2) 第7次調査区7号建物跡南溝遺物出土状況(北より)
P L. 9	(1) 第7次調査区3号土壤全景(北より) (2) 第7次調査区4号土壤(南より)
P L. 10	(1) 第7次調査区5号溝・4・6～8号土壤全景(南より) (2) 第7次調査区9～11号土壤全景(南より)
P L. 11	(1) 第7次調査区8号土壤全景(西より) (2) 第7次調査区10号土壤全景(北より)
P L. 12	(1) 第7次調査区1号溝全景(南より) (2) 第7次調査区1号溝南壁土層断面(南より)
P L. 13	(1) 第7次調査区5号溝全景(西より) (2) 第7次調査区5号溝西壁土層断面(西より)
P L. 14	第7次調査区出土遺物(1/3・1/8・1/12)
P L. 15	(1) 第8次調査区全景(南より) (2) 第8次調査区1号土壤全景(西より)

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

五十川遺跡群の立地する春日丘陵は、福岡平野を北流する那珂川に沿って長くのび、近代までは農業を基盤とする村落とのどかな田園風景が拡がっていました。しかし、郊外の市街化が急速に進み、往々の田園風景は次第に失われつつある。

五十川は、井尻から那珂・比恵へと続く丘陵の中ほどに位置する。この地は、西鉄大牟田線の井尻駅とJR九州鹿児島本線の中間にあり、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅城が拡がり、比較的狭い道路が村中に網の目状に延びている。第5～8次調査区のある五十川二丁目周辺は、この五十川村の古くからの家並みが建ち並んだ中心域にある。既往の発掘調査データからは、弥生時代から古代・中世の遺構が拡がっているものと予想され、試掘調査の結果もこのことを裏付けるデータが得られた。第5～8次調査は、いずれも専用住宅や倉庫の建て替えに伴って申請されたものであり、建築物によって破壊される範囲を発掘調査して記録保存を図ることになったが、その性格上国庫補助事業として実施した。発掘調査にあたっては、地権者諸氏のご協力と発掘作業に従事した方々の労苦に改めて感謝します。

2. 発掘調査の組織

調査委託	第5次調査 谷ヒサヨ 第6次調査 進藤峯行 第7次調査 谷松江 第8次調査 秋田界
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部埋蔵文化財課第2係 文化財部長 柳田純季(現任) 平塚克則(前任) 埋蔵文化財課長 山崎純男(現任) 柳田純季(前任) 埋蔵文化財課第2係長 力武卓治(現任) 山口譲治(前任)
調査庶務	文化財整備課長 上村忠明 御手洗清(現任) 谷口貞由美(前任)
調査担当	埋蔵文化財課第2係 第5次調査 宮井善朗 第6～8次調査 小林義彦

発掘調査番号：9737 遺跡略号：GJK-5 分布地図番号：24-0088

調査地籍：福岡市南区五十川二丁目H17-20

工事面積：	調査対象面積：	調査実施面積：96m ²
-------	---------	-------------------------

調査期間：1997.12.4～12.11

発掘調査番号：9853 遺跡略号：GJK-6 分布地図番号：24-0088

調査地籍：福岡市南区五十川二丁目537-1

工事面積：120m ²	調査対象面積：120m ²	調査実施面積：127m ²
------------------------	--------------------------	--------------------------

調査期間：1998.9.24～9.30

発掘調査番号：9837 遺跡略号：GJK-7 分布地図番号：24-0088

調査地籍：福岡市南区五十川二丁目6-18

工事面積：779m ²	調査対象面積：779m ²	調査実施面積：510m ²
------------------------	--------------------------	--------------------------

調査期間：1998.10.1～11.10

発掘調査番号：9846 遺跡略号：GJK-8 分布地図番号：24-0088

調査地籍：福岡市南区五十川二丁目555

工事面積：280m ²	調査対象面積：280m ²	調査実施面積：19m ²
------------------------	--------------------------	-------------------------

調査期間：1998.11.6～11.10

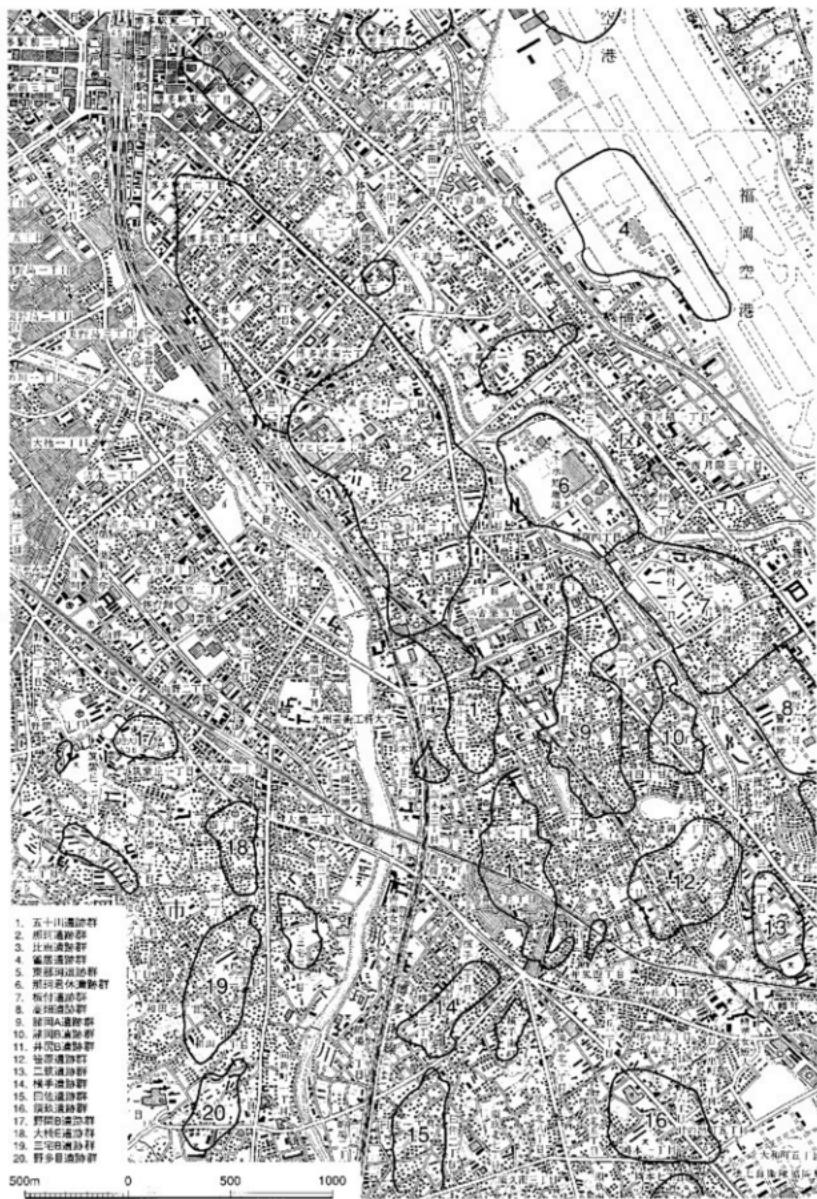


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

五十川遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、春日丘陵から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層部には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥居ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地と推定される須玖岡本から井尻・五十川を経て那珂・比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に連なっている。それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

五十川遺跡群は、この春日丘陵の北端にある那珂・比恵遺跡群とは緩やかな鞍部で連なり、南の井尻遺跡群とは谷を隔てて対峙している。近年の発掘調査データから那珂・比恵遺跡群や井尻遺跡群では、青銅器の鋳型や鋳造具等が相次いで発見され、須玖岡本遺跡周辺に比肩する青銅器鋳造工房の存在が想起されている。また、那珂遺跡群や井尻遺跡群では古代瓦の出土も見られ、寺院跡や官家の施設の存在が指摘されている。

五十川遺跡群内における遺構の初現は、縄文時代晚期に始まる。遺跡群東端の谷部に面した第1次調査区では、土壤などから夜臼式土器が出土したほかに古墳時代から奈良・平安時代の土壤や溝構造が検出され、平瓦や丸瓦も出土している。この第1次調査区の北に隣接している第2次調査区では、弥生時代前期の堅穴住居跡や古墳時代の堅穴住居跡、井戸跡のほか奈良時代や中世の掘建柱建物跡、溝構造などが検出されている。また、第3・4次調査区では、弥生時代後期の堅穴住居跡や掘建柱建物跡のほかに、中世（14・15世紀）の溝に囲まれた居館が検出されている。さらに、遺跡群の北寄りにある妙楽寺には銅矛の鋳型がある。

このように五十川遺跡群は、遺跡群の南北に連なる井尻遺跡群や那珂・比恵遺跡群と同様に丘陵上には弥生時代から古代の遺構が複合的に拡がっている。しかしながら、五十川遺跡群の在り様は、南北の丘陵上に濃密に展開する井尻や那珂・比恵遺跡群とはやや様相が異なり、密度的にやや稀薄な分布状況を呈している。この傾向が単に、調査箇所の少なさに因るものか否かは現状では明らかではなく、今後の調査データの蓄積を待ちたい。

次数	調査番号	所 在 地	調査面積 (a)	報告書	遺跡の概要	調査期間	調査目的
1	7809	南区五十川二丁目98-1	1,449m ²	363集	弥生～古墳時代の土器、漆、奈良～平安時代の土器、瓦、井戸跡	1979.1.22～3.10	民間宅地開発
2	8339	南区五十川二丁目99	660m ²	111集	古墳時代の住居跡、古墳時代の石器、轍、奈良時代の土器、瓦、井戸跡、漆	1983.4.25～6.18	民間宅地開発
3	9538	南区五十川二丁目248	905m ²	570集	古墳時代の住居跡、古墳時代の土器、轍、奈良時代の土器、瓦、井戸跡、漆	1995.11.9～ 1996.1.13	共同住宅建設
4	9704	南区五十川二丁目 1193-4	285m ²	570集	古墳時代の井戸跡、中世の磁物 跡、土壤、溝等	1997.4.8～5.5	共同住宅建設
5	9757	南区五十川二丁目 17-20	96m ²	本報告	古墳時代後期の住居跡、掘立柱 建物跡	1997.12.4～ 12.11	共同住宅建設
6	9835	南区五十川二丁目 537-1	127m ²	本報告	古代の掘立柱建物跡、近世の土 器	1998.9.24～9.30	舎庫建設替え
7	9887	南区五十川二丁目6-18	510m ²	本報告	古墳時代の土壤、中世～近世の 建物跡、土壤、溝構造	1998.10.1～ 11.10	専用住宅建設
8	9848	南区五十川二丁目555	19m ²	本報告	土壤	1998.11.6～ 11.10	専用住宅建設

五十川遺跡群発掘調査地一覧

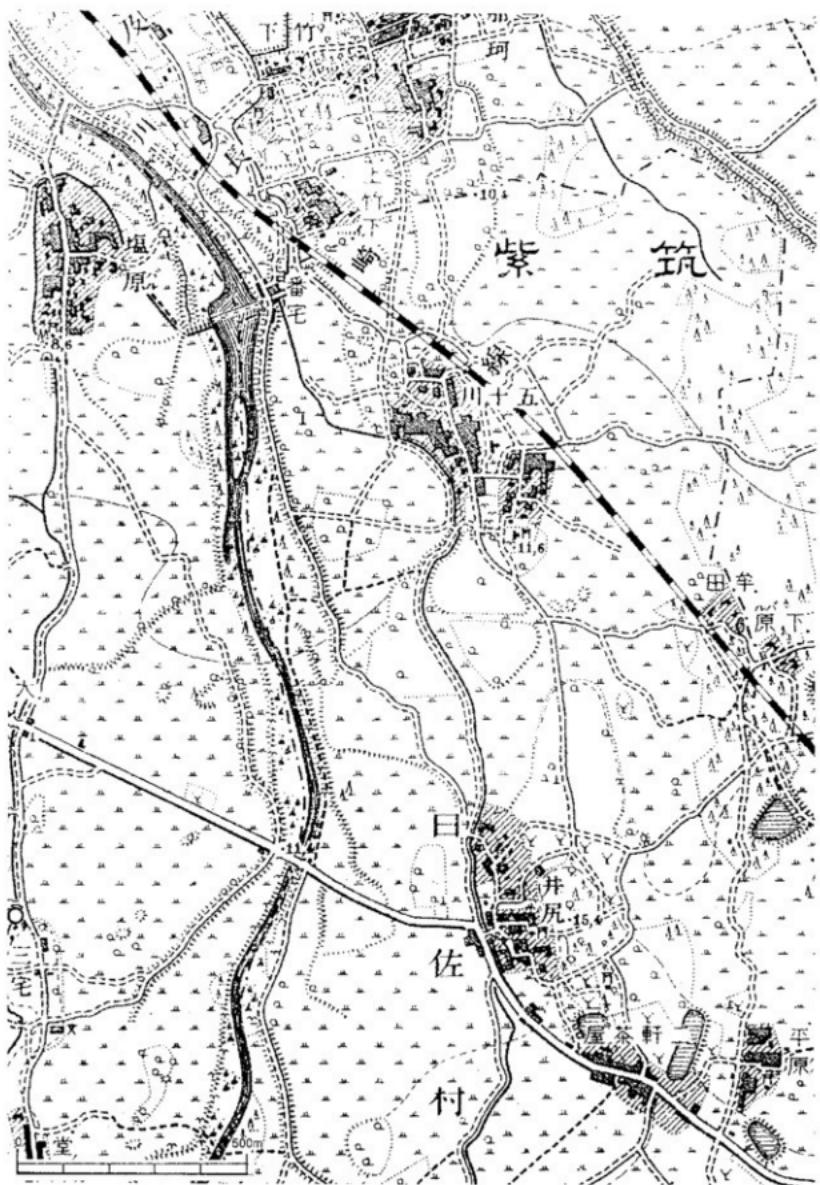
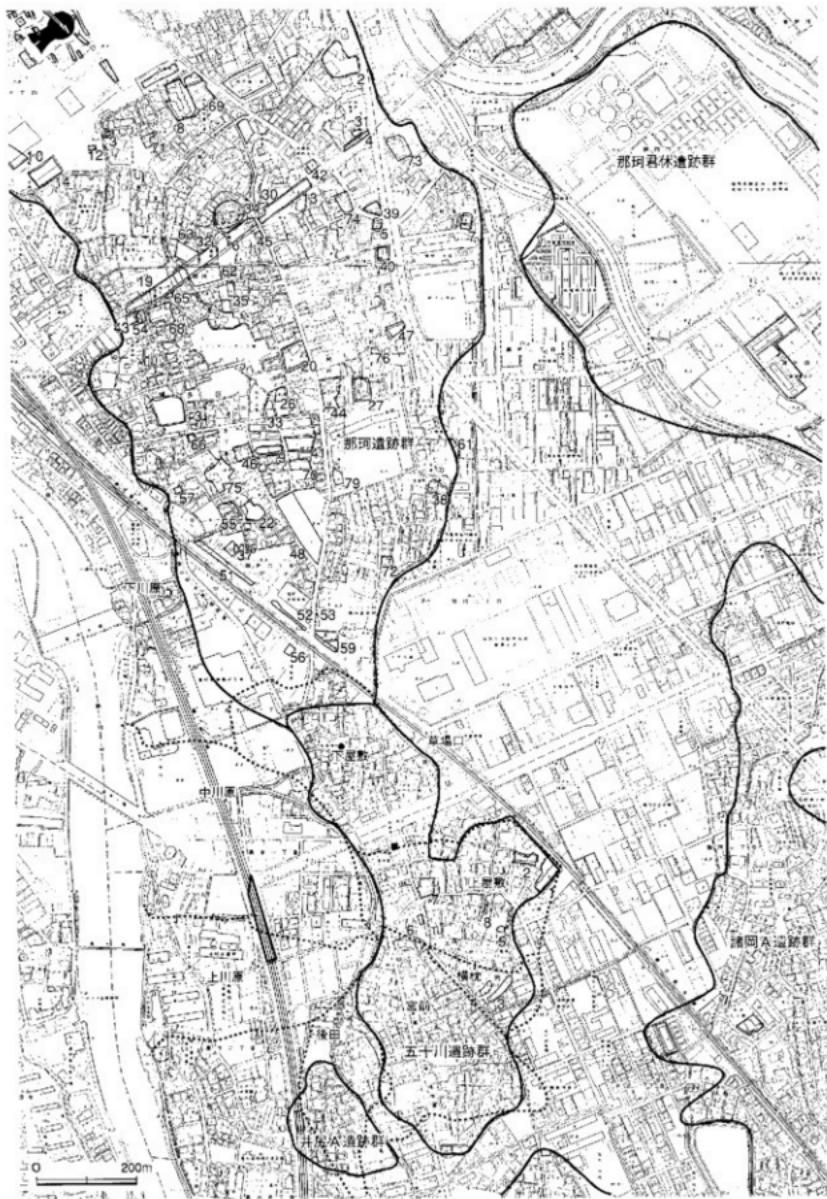


Fig. 2 五十川遺跡群周辺旧地形図 (1/11,000)



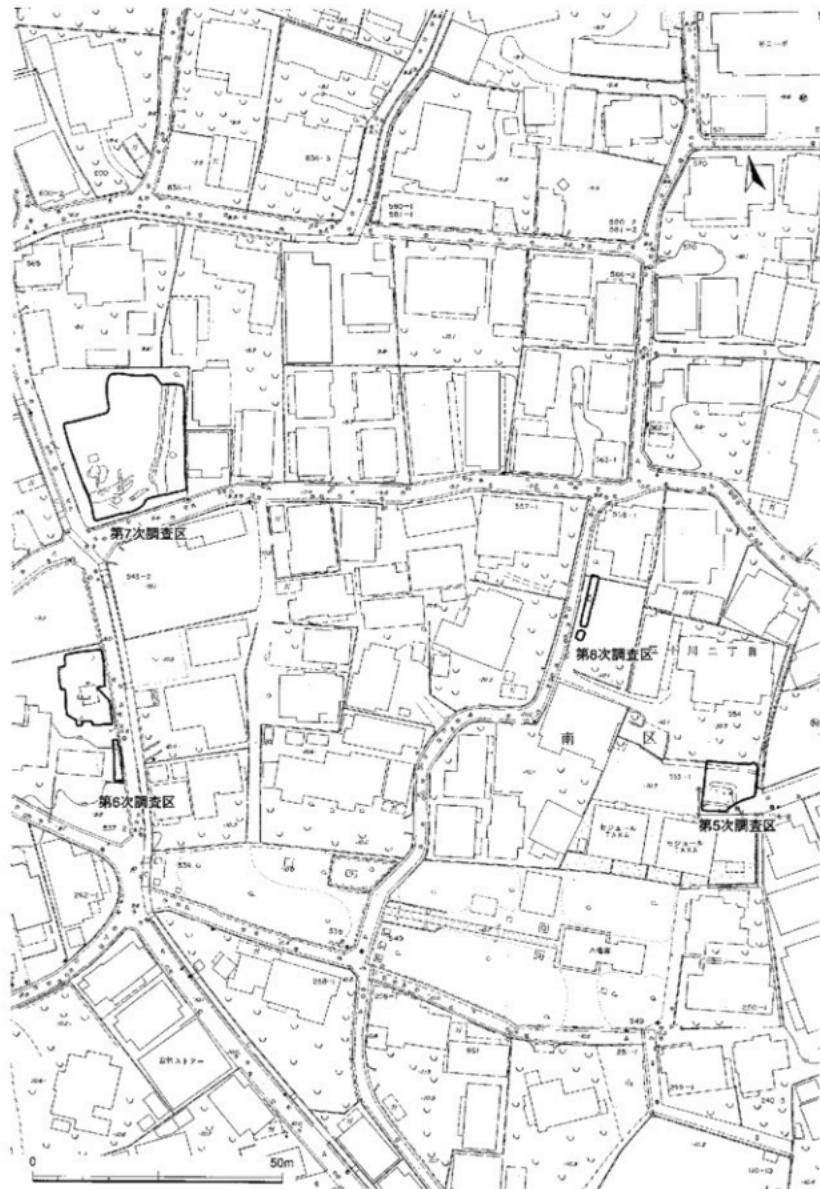


Fig. 4 五十川遺跡群第5~8次調査区周辺現況図 (1/1,000)

II. 第5次調査の記録

1. 調査に至る経過

1997年9月24日付で、谷ヒサヨ氏より、共同住宅建設予定地における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である五十川遺跡内に位置しており、遺構の存在が予想されることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて97年11月11日に試掘調査を行った。その結果、申請地内には遺構が良好な状態で検出された。この結果をもとに谷氏と保存についての協議を行った。計画されている建物自体は軽量鉄骨造で、比較的基礎が浅いため、盛土のうえ慎重工事とし、現状保存を図ることになった。但し敷地内的一部分には市道に供用する部分が開削されており、この部分については永久構築物となることから、発掘調査をおこない、記録保存が必要と判断した。発掘調査については、調査規模が小さいこと、市道部分であることなどから、国庫補助により行うこととなった。調査は1997年12月4日に着手し、12月11日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊(調査年度) 生田征生(整理年度)

調査総括 講師 荒巻輝勝(調査年度) 山崎純男(整理年度)

第2係長 山口讓治(調査年度) 力武卓治(整理年度)

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 河野淳美(調査年度) 文化財整備課 御手洗清(整理年度)

試掘調査 埋蔵文化財課事前審査担当 屋山洋 松村道博

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 織川ゆかり 石丸洋子 鍋山治子
坂本俊子 穴井加菜子

整理作業 林山紀子

また、調査時には地権者の谷ヒサヨ氏には多くのご配慮をいただいた。記して感謝申し上げる。

遺跡調査番号	9720		遺跡略号	GJK-5
調査地地番	福岡市南区五十川2丁目17-20			
開発面積	854m ²	調査対象面積	96m ²	調査面積
調査期間	1997年12月4日～12月11日		分布地図番号	24-0088

3. 調査の記録

(1) 検出遺構 (Fig. 5)

五十川5次調査区は、遺跡群の北東部に当たり、五十川八幡社の北側に接した地点である。遺構面は現地表面から50cmほどの深さで検出された。検出面は赤褐色の鳥栖ローム面である。100m²足らずの狭小な調査区のため、検出した遺構も断片的で、不明瞭な点が多い。出土遺物もなく、遺構の時期も不明なところが多いが、時期の推定できる遺構は、古墳時代後期を中心とするようである。以下、主要な遺構について述べる。

溝 溝は3条検出した。溝1は調査区中央を逆L字に屈曲する溝である。幅1m程を測るが、極めて

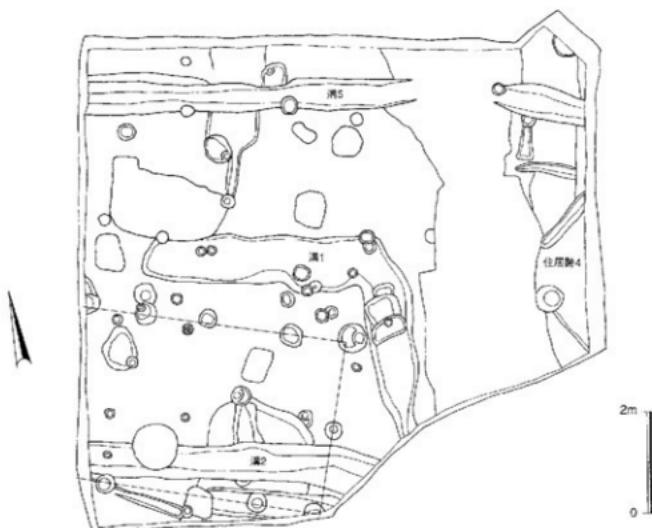


Fig. 5 第5次調査区遺構配置図 (1/100)

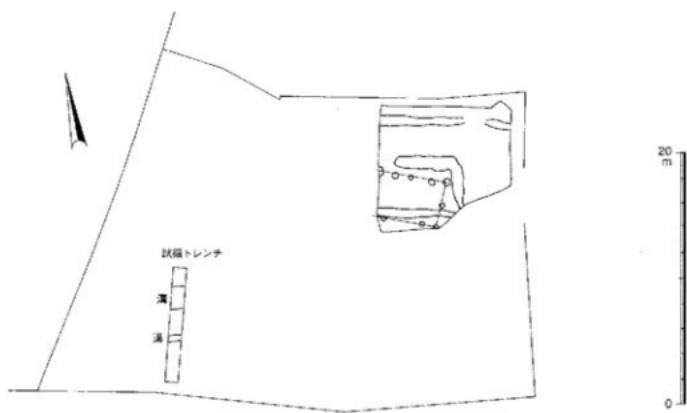


Fig. 6 第5次調査区位置図 (1/400)

浅く、検出面から5cm程を測るに過ぎない。出土遺物は小片のみで、時期がよくわからないが、須恵器片、土師器片が出土しており、古墳時代後期と考えられる。溝で囲まれた中には掘立柱建物が検出されており、建物の雨落ち溝の可能性が高いが、後述するように疑問もないわけではない。

溝2、溝5は古墳時代後期の溝である。ほぼ東西方向に平行して延びている。溝2は幅60cm程、深さ20~50cm程を測る。溝5は幅60~70cm、深さ10cm程を測る。両者の間隔は7.2m程である。道路の側溝などの可能性も考慮すべきであろうが、如何せん調査面積が狭すぎるため何ともいえない。今後の調査の留意点としておきたい。

住居跡 古墳時代の竪穴式住居の一部と思われる造構を1基検出している。調査区東端で検出した住居跡4は方形竪穴住居の隅部分であろう。検出面からの深さ10~20cmを測る。主柱穴はこの範囲では確認できないが、北辺には壁溝が認められる。西壁際の床面には焼上もみられる。遺物はほとんど出土していないが、古式土師器らしい破片が見られる。

掘立柱建物 溝1に囲まれた内部で検出した。2間×4間以上と思われる。柱穴の深さは検出面から50~80cmであるが、図上北側桁行き中央の柱穴のみ15cmと浅い。これに対応する南側の柱穴は搅乱によって削平されているものと考えられる。溝1との関係であるが、東北隅で接近しすぎることや、東辺で方向を進えること、柱穴の間隔が広くなる箇所と、溝の途切れる箇所が一致しないことが、同一時期の造構と考えるには疑問の残るところである。

(2) 出土遺物 (Fig. 7)

出土遺物は総量でコンテナ3箱分である。図化できる遺物はさらに少ない。以下主要な物について報告する。

1は須恵器高环である。溝2壁際の床面で出土した。環部は段を有し、口縁端部は丸く收める。段から下にカキ目を施す。脚部は裾が大きく広がり、端部を上下に拡張する。中位に二条の沈線をめぐらせる。

2は住居跡4の出土品である。古式土師器の壺口縁部と考えられる。端部を薄く仕上げる。胎土は比較的精良で、全面を横ナデで丁寧に仕上げている。

3~10は溝5の出土品である。3は須恵器の环である。口径11cmを測り、ほぼ完形である。体部は回転ヘラ削りを施した後、上位1/3ほどをナデ消している。底部には6本の縦を刻んだヘラ記号が見られる。4も須恵器环である。半分程度の遺存で、復元口径12cm程である。口縁部はあまり反らない。体部全面に回転ナデを施す。体部外側の一部に条線が見られるが、意識的なものではないようである。5も須恵器环である。口縁部は付根が厚い断面三角形を呈する。外側下位1/3ほどに回転ヘラ削りを施す。6は器種、器形がよくわからない。やや深めの壺のような器形かとも思われるが、端部を水平に拡張して坦面を作るのが特徴的である。体部に沈線をめぐらせる。7は須恵器环蓋である。端部は薄く尖らせる。天井部に回転ヘラ削りを施す。復元口径13cm程である。8も須恵器环蓋である。口縁端はわずかに肥厚し、丸く收める。天井部に回転ヘラ削りを施す。9は土師器甕である。口径16cm程の小形の壺である。口縁端部は丸く仕上げ、頸部は緩やかに屈曲する。肩部は撫で肩で、胴部はあまり張らないようである。外側はハケメ、胴部内面はケズリを施す。頸部内面は調整が難く、粘土の接合痕が明瞭に残っている。10は須恵器环である。復元口径11cm程を測る。口縁部は強く外反している。遺存部は外側回転ナデで、回転ヘラ削りの痕跡は認められない。

4. 小結

今回の調査区はあまりに小規模で、特にまとめるようなことはない。強いて特徴を挙げるとすれば、溝の検出であろう。ほぼ平行して伸びる二条の溝、建物を巡るように屈曲する溝等、周辺調査の際に留意すべき成果といえる。実は、試掘調査の際にも注意すべき遺構が確認されている（Fig. 6）。試掘トレンチは調査区と対称的な位置である西南部に $1\text{m} \times 9\text{m}$ の規模で設定されているが、溝と思われる遺構が二条確認されている。北側の溝は幅広で、調査区の溝 1 に類似する。また南側の溝は狭く、調査区の溝 2、溝 5 に類似する。また方向もほぼ一致している。溝 1 が南側へ屈曲した後、再び西側へ屈曲し、試掘トレンチ内の北側の溝に取り付くとすれば、屋敷地を構成する可能性も考慮しておく必要があろう。

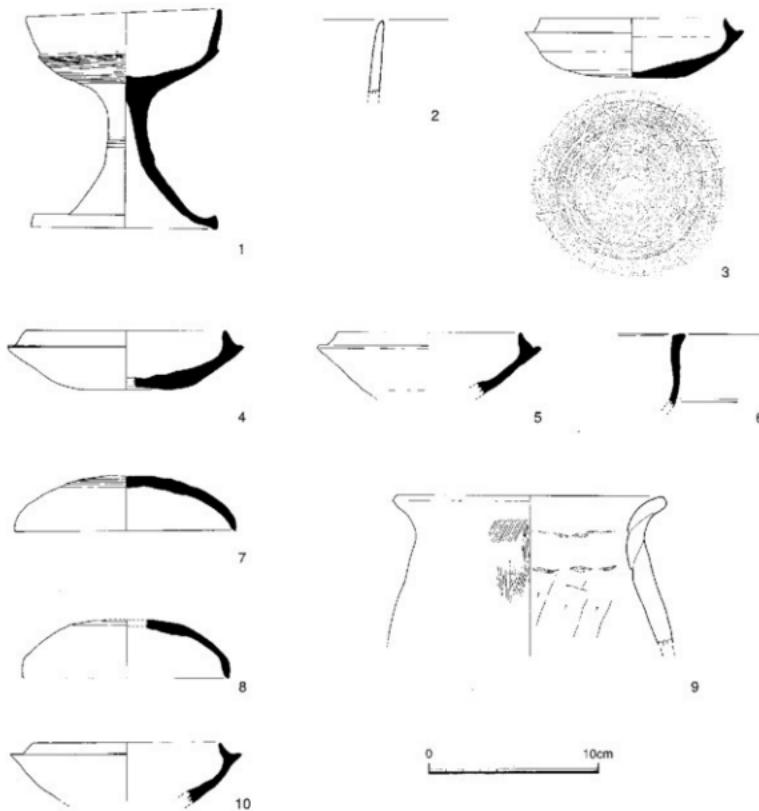


Fig. 7 出土遺物実測図 (1/3)

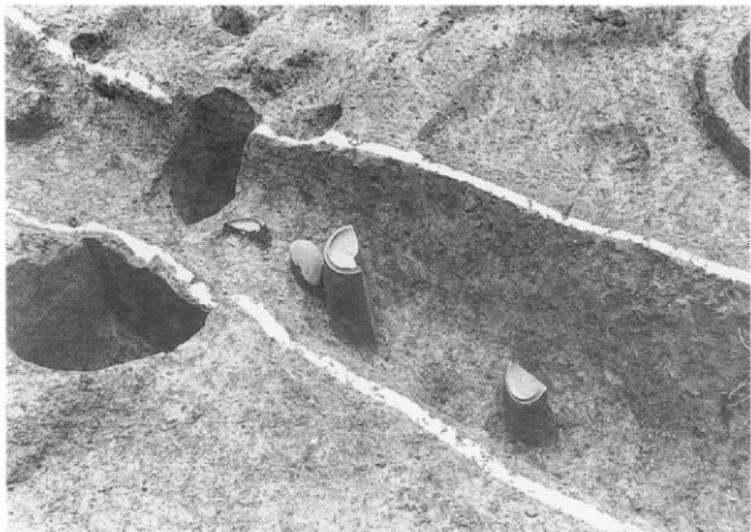
PL. 1



(1) 第5次調査区全景（西より）



(2) 溝5全景（西より）



(1) 溝5 遺物出土状況（北より）



(2) 溝2 遺物出土状況（北より）

III. 第6次調査の記録

1. 調査にいたる経過

第6次調査区は、五十川二丁目536-1に位置し、平成10(1998)年8月20日に地権者の進藤峯行氏から農業倉庫の建て替え工事に伴う埋蔵文化財の有無確認の申請が、提出された。申請地は、周知の五十川遺跡群内にあって遺構の存在が予想されることから、平成10(1998)年9月8日に試掘調査を実施した。試掘調査は、東西に走る道路に並行して、7m余のトレンチを南北に設定して実施した。その結果、地表下15cmで鳥居ローム層に掘り込まれた溝と柱穴を検出し、出土遺物から古代の遺構が拡がっていることが予想された。当初の建築設計案では、盛土をして遺構面の保存を計る予定であったが、設計案の変更により発掘調査をして記録保存をすることになった。発掘調査は、平成10(1998)年9月24日から始め、9月30日に埋め戻しまでを終了した。

2. 調査体制

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男
 第2係長 力武卓治 山口譲治(前任)
 調査庶務 文財整備課長 上村忠明
 御手洗清 谷口真由美(前任)
 調査担当 埋蔵文化財課第2係 小林義彦
 調査・整理作業 有田恵子 石川洋子 石橋陽子
 今村ひろ子 古賀典子 大司夏子 田中トミ子
 福場真由美 三栗野明美 持丸玲子

発掘調査時には諸事にわたって地権者の進藤峯行氏のご理解とご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

3. 調査の記録

1) 調査の概要

五十川遺跡群第6次調査区は、那珂川右岸にのびる低丘陵上に立地する。この低丘陵は、春日市の須玖岡本から井尻・五十川を経て那珂・比良へと南北に長くつづく春日丘陵と総称される洪積台地で、やや北寄りに位置する。五十川遺跡群は、東西長が750mで、南北幅が100~300mの範囲に拡がり、面積は15ha余になる。最頂部高は11mほどである。

第6次調査区は、五十川遺跡群の立地する洪積台地のほぼ中央部に位置している。調査区の西方には

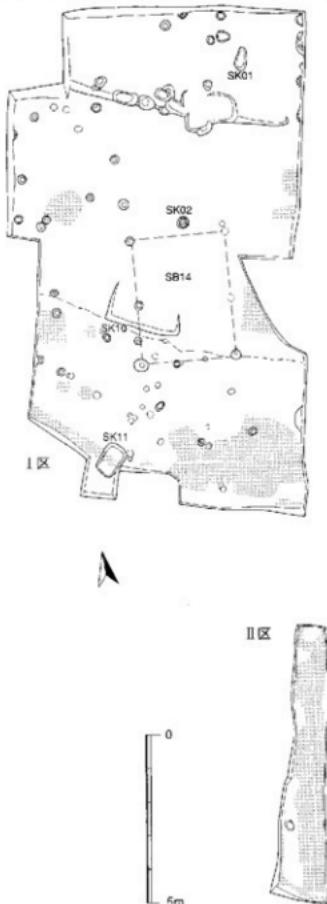


Fig. 8 第6次調査区遺構配置図 (1/150)

東にむかって半円形に区割りされた河川敷に沿って小川が北流して那珂川に合流し、北東側には小さな谷が北から貫入している。調査区の北30mの距離には第7次調査区が、東へ100mの距離には第8次調査区が位置している。

発掘調査は、排土処理の都合から調査区を南北に二分(I区)して実施し、I区の調査終了後に申請地南端に建設される車庫によって削平される進入口部分をトレンチ状(II区)に調査した。

発掘調査の結果、I区では2ヶ所に階段状の削平がみられた。この削平は、那珂川の下流に沿うように北にむかって低くなっている。水田化による開削と考えられる。このI区では、掘立柱建物跡や土壤等を検出したが、その密度はやや疎らである。また、II区では柱穴1基を検出したにとどまった。

なお、II区の調査は重機の稼働が不可能なためにすべて人力によった。発掘作業に従事した人々の労苦に改めて感謝します。

2) 建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は、I区のほぼ中央部で1棟を検出した。しかし、削平を受けて東側柱のうち北側の2穴は消失しており、遺構の遺存状況は余り良くない。この1棟のほかに柱痕跡を残す良好な柱穴が幾つか検出されているが、1棟の建物跡としてまとめ得るまでには至らなかった。

14号建物跡 SB-14 (Fig.9 PL.5)

14号建物跡は、調査区中央部に位置する1間×2間の東西棟の建物跡である。近現代期の開削による段落ちと重なっているため、北側柱の柱穴は南隅柱を除いて2穴は消失している。建物跡の桁行長は3.6mで、柱間は1.8m。梁行長は2.8mである。柱穴は、径が25~45cm、深さが15~62cmで、遺存状況の良い南北隅柱では、径が13cmほどの柱痕跡が確認された。

3) 土壙 (SK)

土壙は、すべてで4基を検出した。形状的には、方形～長方形プランのもの(SK-10・11)と焼上壙(SK-01)、廻埋置土壙(SK-02)があるが、時間的に大きな差違がある。また、分布的には散漫な状態で全体像は明らかでないが近世以降のものが調査区の北側に位置する傾向が窺われる。

1号土壙 SK-01 (Fig.8 PL.3)

1号土壙は、調査区の北東端にある小型の焼上壙で、南方2.5mの距離には2号土壙が位置している。平面形は、長径が75cm、短径が35cmの不整梢円形プランをなしている。深さは10cmで、断面形は浅い舟底状を呈

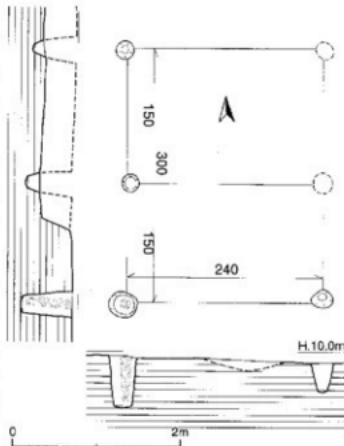


Fig. 9 14号建物跡実測図 (1/60)

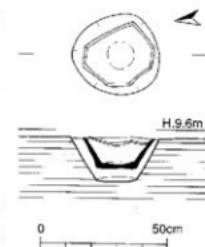


Fig. 10 2号土壙実測図 (1/20)

している。壁面から壇底は、受熱して赤変しているが焼成度は低い。覆土は、暗灰褐色～黒色土で焼土粒と炭片が比較的多く混入していた。遺物は、1点も出土していないが、近世以降のものと考えられる。

2号土壤 SK-02 (Fig.10 PL.5)

2号土壤は、調査区中央部にある埋甕で14号建物跡の北梁柱のすぐ北隣に位置している。土壤は、径30～35cmの円形プランで、その中央に底径21cmの近世壺をほぼ水平に埋置している。甕は、底部から10cmほどを残して削平されているが、甕内には口縁部の一部が混入していた。

出土遺物 (Fig.11)

1は、口径40cm、底径が21cmの肥前系ハンドウ甕で、器高は60cmほどにならうか。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、その上端に短く外反し、内唇下に緩やかな段を作る帯状の口縁部を貼り付けている。胴部は、肩の張らない倒卵形をなしている。底部は、平底でやや厚く、外底面には4カ所に胎土目痕が残っている。調整は、ロクロ整形による回転ヨコナデで、胴部下半の内外面には格子目タタキ痕が残っている。胎土は良質で、内唇面が釉薬を剥ぎ取っているほかは濃茶褐色の鉄釉がかかっている。焼成は良好。18～19世紀代の產であろう。

10号土壤 SK-10 (Fig.12 PL.6)

10号土壤は、調査区中央部に位置する大型の土壤で、14号建物跡と重複している。北壁側は、近現代期の開削で消失しているが、平面形は一辺が約2.3mほどの方形プランをなそう。壁高が40cmの壁面は、やや急峻に立ち上がり、床面はフラットである。覆土は、褐～暗褐色土の単一層で、遺物は上師器小皿片がわずかに出土した。

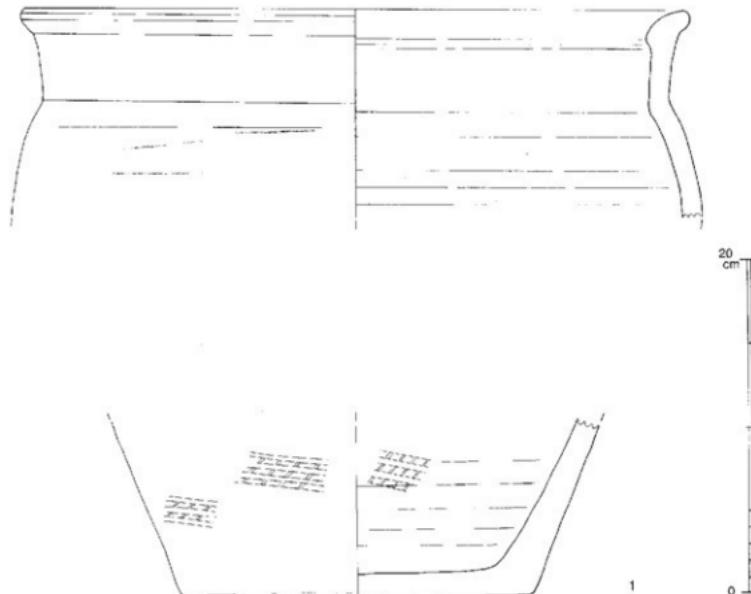


Fig. 11 2号土壤出土遺物実測図 (1/3)

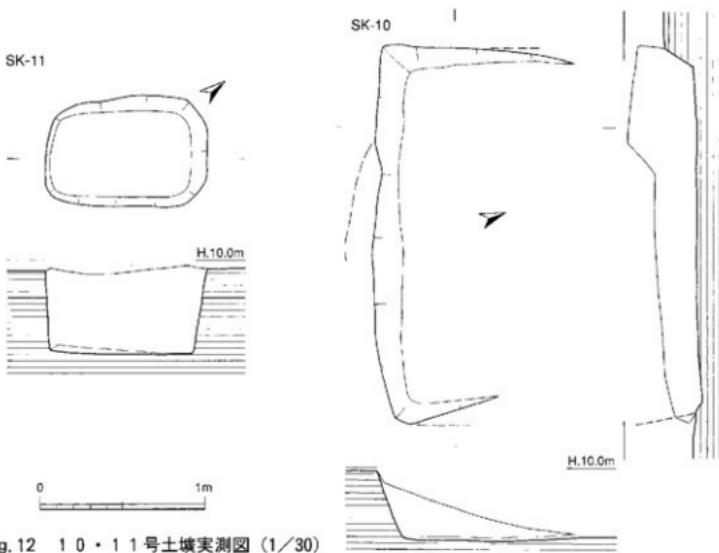


Fig. 12 10・11号土壤実測図 (1/30)

11号土壤 SK-11 (Fig.12 PL.6)

11号土壤は、調査区の南西端にある小型の土壤で、14号建物跡の南隅側柱から南へ2mの距離に位置する。平面形は、長辺が97cm、短辺が55~67cmの隅丸長方形プランを呈し、N=36°—Eに主軸方位をとる。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は60cmを測る。遺物は一片も出土しなかったが、覆土は他の造構と異なる黒褐色土の單一層であり、弥生時代の造構の可能性がある。

4) その他の造構と包含層出土の遺物

調査区内には、建物跡や土壤のほかにピットや浅い溝が検出された。これらのピットや造構上の表土層からは、須恵器片等の遺物がわずかに出土している。ただし、表土層下からは明らかな遺物包含層は検出できなかった。

出土遺物 (Fig.13)

2は、口径13cmの須恵器壺である。体部は緩やかに内湾し、口縁部は短くストレートに外反する。調整は、外底面は回転ヘラケズリ、内底面はナデのほかヨコナデ。胎土は精良で、細砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色。



包含層出土遺物実測図 (1/3)

4. 小結

発掘調査で検出された造構は種々あるが、時間的には隔たりがあり、分布や密度においてもまとまつた傾向は示していない。これは調査区の広さからあるいは立地的なものかは即断できないが、弥生時代から近世まで断続的ながら集落域が形成されていたことは明らかであり、周辺の調査と併せて検討したい。

PL. 3



(1) 第6次調査区Ⅰ区北側全景（北東より）



(2) 第6次調査区Ⅰ区南側全景（西より）



(1) 第6次調査区Ⅱ区全景（北より）

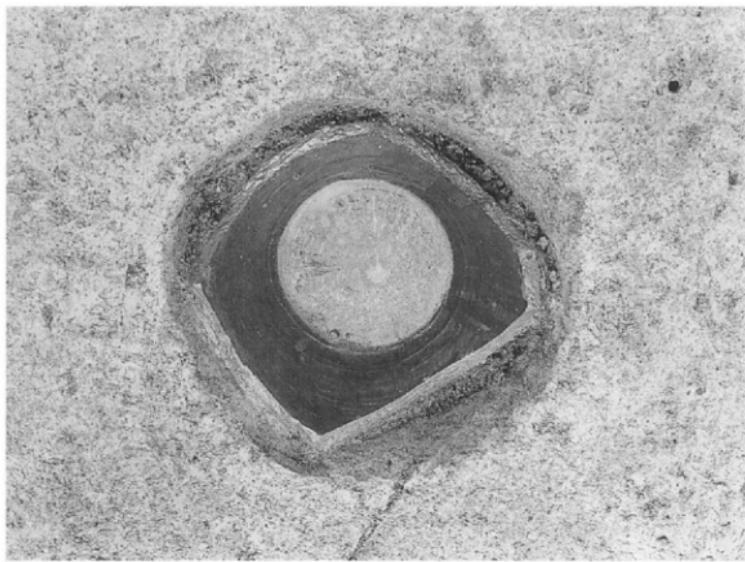


(2) 第6次調査区Ⅱ区全景（南より）

PL. 5



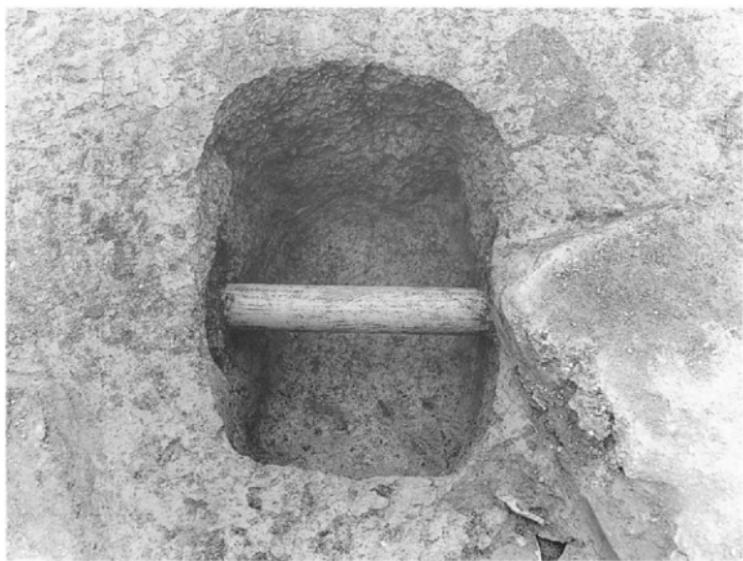
(1) 第6次調査区14号建物跡全景(東より)



(2) 第6次調査区2号土壤全景(西より)



(1) 第6次調査区10号土壤全景(南より)



(2) 第6次調査区11号土壤全景(東より)

IV. 第7次調査の記録

1. 調査にいたる経過

第7次調査区は、五十川二丁目6-18に位置し、平成10(1998)年7月30日に地権者の谷松江氏より、住宅の建て替えに先立って埋蔵文化財の有無確認の事前審査願いが提出された。申請地は、五十川遺跡群内にあって遺構の存在が予想されることから、平成10(1998)年9月22日に遺構確認の試掘調査を実施した。



Fig. 14 第6・7次調査区位置図 (1/500)



Fig. 15 第7次調査区遺構配置図 (1/150)

実施した。その結果、表土層下5~10cmで柱穴等の遺構が確認されたが、基礎杭による遺構の破壊が広範囲に及ぶために発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。発掘調査は、平成10(1998)年10月1日に開始し、11月7日に埋め戻しを終え、10日にしてすべての機材を撤収して調査を完了した。

2. 調査体制

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎紀男 第2係長 力武卓治 山口謙治(前任)

調査庶務 文化財整備課長 上村忠明 御手洗清 谷口真由美(前任)

調査担当 埋蔵文化財課第2係 小林義彦

調査・整理作業 有田恵子 石川洋子 石橋陽子 泉本タミ子 今村ひろ子 大瀬良直哉 金子二三枝 木村文了 幸田信乃 占賀典子 鳩ヒサ子 大司夏子 田中トミ子 塚木よし子 鍋山治子 西田文子 福場真由美 北条こず江 三栗野明美 持丸玲子 森田祐了 山田政治

発掘調査にあたっては、諸事にわたってご理解とご協力をいただいた地権者の谷松江氏と発掘作業に従事した人々の労苦に改めて感謝します。

3. 調査記録

1) 調査の概要

五十川遺跡群第7次調査区は、那珂川の右岸を川の流れに沿うようにして南北にのびる五十川遺跡群のほぼ中央部に立地している。調査区から南へ30mの距離には第6次調査区があり、南東へ100mの距離には第8次調査区が位置している。これまでの周辺域の調査では、弥生時代から古墳時代、古代、中世の集落遺構が複合的に確認されている。試掘調査でも中世の遺構と遺物が検出されており、該期の集落域が拡がっているものと予想された。

発掘調査は、排土処理の都合から調査区を東西の2区画に分割して実施することになり、はじめに東側の約60%を調査した。その後、排土を移動して西側の40%を調査して直ちに埋め戻し作業を行ったが、調査区の反転に際しては遺構の照合が容易なように重複部を多く取るように努めた。

その結果、建物跡や土壤、溝遺構などの中・近世を中心とする遺構を検出したが、調査区北部から東縁にかけての区域は既存建物の建築や水田化による開削によって大きく削平されていた。そのため深い2条の溝と1基の土壤を除いてほとんどが消失しており、遺構の多くは調査区の南部にまとまって分布している。殊に、調査区の東辺と南辺から検出された大溝は、溝幅が

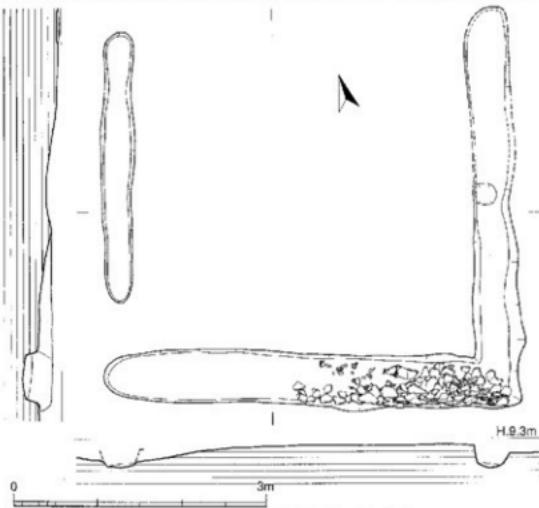


Fig. 16 7号建物跡測定図 (1/60)

2 m余り、深さが1 m余りの掘状をなし、その配置は「T」字状に直交するような関係にある。また、この2条の大溝の間には5 mほど の通路状の空間域があり、開削時に有する機能と構造を考えると興味深いものがある。

2) 建物跡 (SB)

建物跡は、調査区の南側で1棟を検出した。この建物跡は、北壁側を除いた三方に雨落ち溝が「コ」字状に巡る構造であるが、建物の規模を測る柱穴や礎石痕は確認できなかった。また、南側の雨落ち溝には陶磁器や瓦質甕などが多く量に投棄されていた。建物跡は、この1棟を除いては検出できなかった。しかし、この建物跡のほかにも柱痕跡を残す柱穴が幾つかあり、このほかにもう幾棟かの建物跡が存在した可能性も考えられる。

7号建物跡 SB-07

(Fig.16 PL.8)

7号建物跡は、調査区の南西部に位置し、西側は9・10号土壙と、南側は5号溝と重複しており、その中でもっとも新しい。建物跡の周囲には、北壁側を除いて三方に「コ」字状の浅い溝が巡っており、雨落ち溝と考えられる。溝は、長さは4.

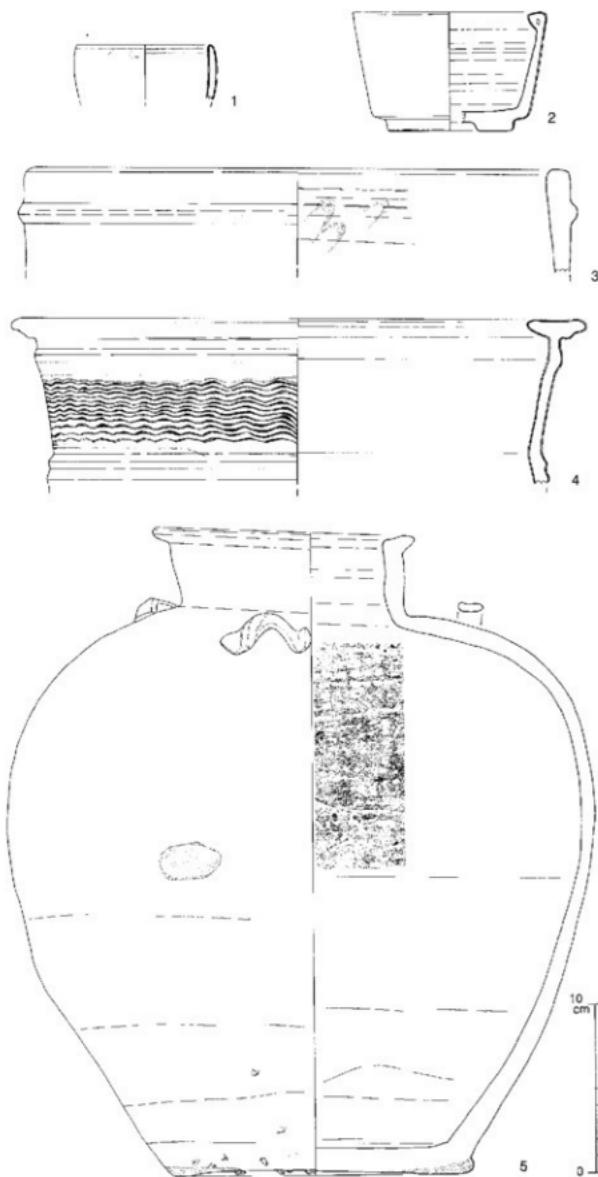


Fig.17 7号建物跡出土遺物実測図 (1/3)

8m、幅は40~60cm、深さが10~25cmで、断面形は溝底が浅い凹レンズ状の箱形をなしている。東溝と南溝は南東隅が「L」字状に繋がっているが、西溝は東溝との間に40cmほどの間隙がある。この間隙が山入り口的な機能を有するのか内かは、北溝がない現状では判断しがたい。南溝からは近世磁器や陶器・瓦質の甕などが一面に敷き詰められた状態で出土した。また、溝に囲まれた空間からは、礎石や柱穴は未検出であるが3箇所四方の建物が建てられていたものと推測される。

出土遺物 (Fig.17 PL.14)

1は、口径9cmの肥前染付磁器碗である。口縁部の内面には2条の圓線を描く。18世紀後半のものであろう。2は、口径10.8cm、高台径7cm、器高が6.6cmの肥前系青磁香炉である。口縁部は、端部を内に折り返して三角形に象り、中心は中空に作っている。内面と蛇の目高台は無釉で、外面には淡いオリーブ色の半透明釉を施釉している。17世紀末~18世紀前半の座であろう。3は、口径が30cmの瓦質の火舎である。口縁部下には、1条の緩い「コ」字状凸帯が巡る。調整は、内面が押圧後にハケ目、外側は横方向の研磨で、にぶい橙色を呈している。4は、唐津焼の陶器二彩甕で、口径は32cmである。頸部には櫛描きの波状文を描き、鉄釉と銅緑釉を掛け分けている。頸部と胴部の境には、浅い三角凸帯を連続して貼り付けている。17世紀後半~18世紀前半の座。5は、口径15.5cm、底径17.4cm、器高が38.7cmの褐釉陶器の三耳壺である。逆「L」字状の口縁部は小さく外反し、頸部は短く直口する。肩部の最高位には、対称位の3ヶ所に粘土紐で半円形の把手を貼り付けている。ロクロ成形で、外側は格子目タタキ後にナデ調整。底面には3カ所に日積み痕が残っている。

3) 土 壤 (SK)

上壤は、すべてで7基を検出した。分布的には、東辺にある1基(SK-03)を除いて、調査区の南西域に比較的まとまって拡がる傾向が窺われる。また、プラン的には円~橢円形のものと方形のものに大別される。この分布的、プラン的な差違が時間差によるものか、あるいは別の要素に左右されるのかは現状では明らかではない。

3号土壙 SK-03 (Fig.18 PL.9)

3号土壙は、調査区の東端にある円形土壙で、1号溝の東に位置している。平面形は、長径が130cm、短径が110cmの瓢形状の不整な橢円形プランをなしている。深さは約100cmで、東側には壙底から20cmほどの高さに半円形のフラット面を造る2段掘りの構造をなしている。水田化の開削による削平を勘考すると本来の深さは150cm以上と推定される。覆土は、暗灰褐色~黒褐色土で、玉縁II縁の白磁碗や土師器小皿が出土している。

出土遺物 (Fig.19)

6・8は、土師器壺である。6は、高台径が5cm、高台高は8mmである。胎土・焼成とも良好で、白灰色。8は、口径が11cm、器高は7cmで、体部は浅い仙球形をなす。胎土・焼成とも良好で、色調は橙色。7は、高台径が6cmの土師器壺で、高台高は1cmである。色調は内面が灰白色、外側が淡橙色。9は、口径が15cmの白磁碗で、口縁部は断面形が浅い三角形の玉縁状をなす。体部下半は無釉で、黄色みがかった灰白色。10は、玄武岩の大型蛤刃石斧の未製品である。

4号土壙 SK-04 (Fig.18 PL.9・10)

4号土壙は、調査区の南端に位置し、西へ5mの距離には6号土壙がある。土壙は、その大半が搅乱によって消失しており、全容は判然としない。覆土は、暗褐色~暗茶褐色土の単一層で、上師器片が出土している。

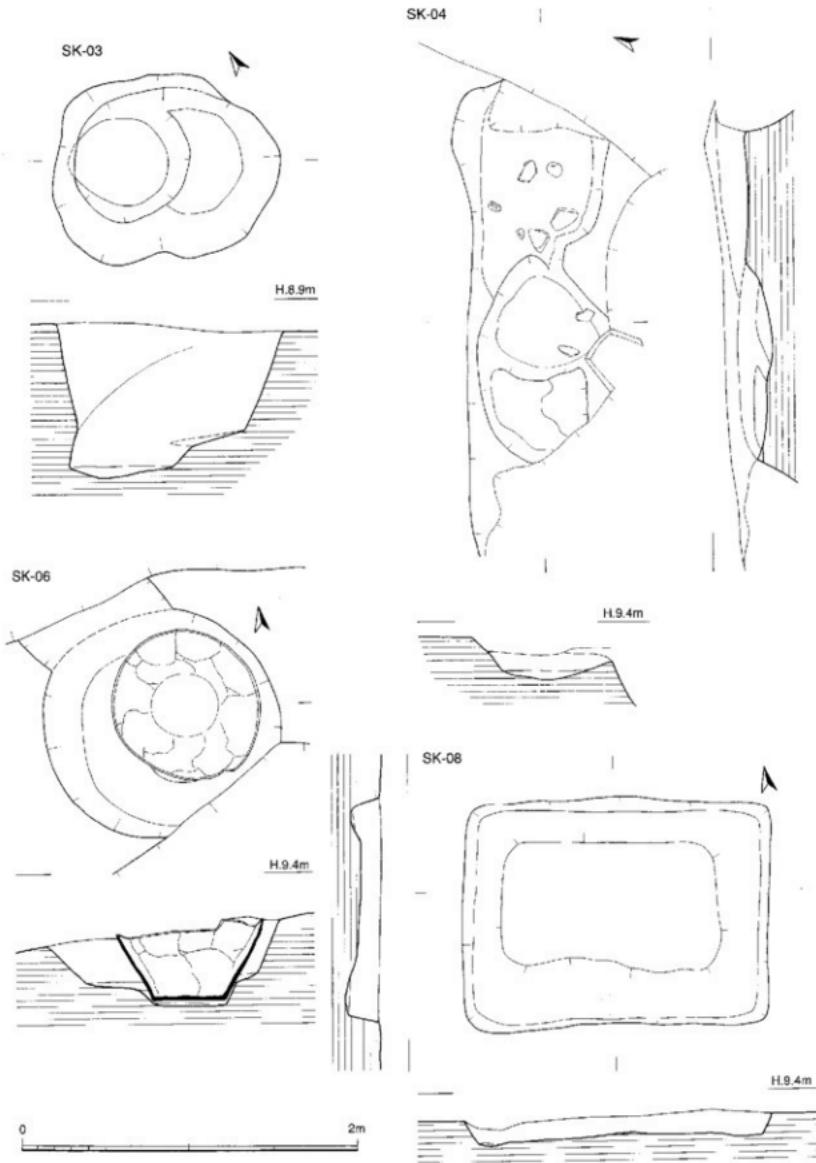


Fig. 18 3・4・6・8号土壤実測図 (1/30)

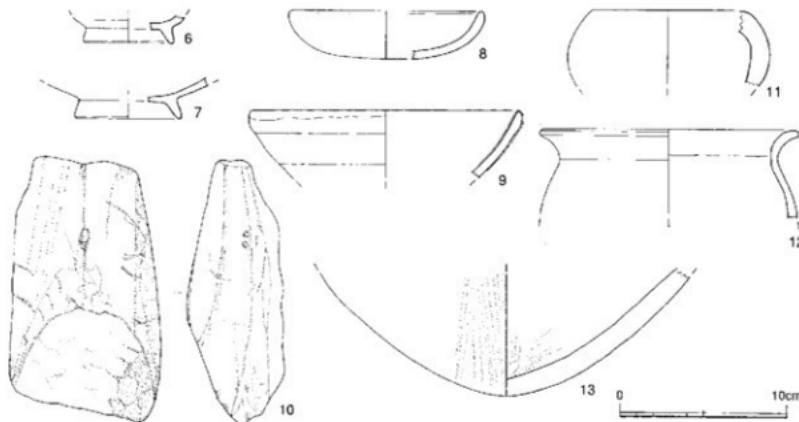


Fig. 19 3・4号土壌出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 19)

11は、口径が11cmの手捏ねの土師器塊である。調整は押圧後にナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は橙色。12は、口径が15.6cmの土師器壺である。緩やかに外反する口縁部は、端部は水平に小さく摘み出している。13は、尖り底の土師器壺。外面は粗いハケ目、内面は押圧後にナデ。胎土は良質で、若干の砂粒を含む。

6号土壌 SK-06 (Fig. 18 PL.10)

6号土壌は、調査区の南西部にある埋甕土壌で、7号建物跡南東隅から南へ1mの距離に並行して位置している。土壌は、はじめに直径が140cmの円形プランを掘り、その壙底の東壁に寄って55~60cmの円形土壌を深さ10cmほど更に掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。この2段目の土壌に底径が42cmの瓦質の大甕を水平に埋置し、その周囲に黄褐色粘土ブロックを含んだ暗灰褐色土を一気に埋め戻して安定を図っている。この大甕と7号建物跡の南溝から出土した瓦質の甕は同系のものである。

出土遺物 (Fig. 20 PL.14)

14は、口径7.1cm、底径5.4cm、器高が1.4cmの土師器小皿である。体部は回転ナデ、内底面はナデ、底面は糸切り後に板目圧痕が付いている。内面には油煙が附着している。胎土は良質で、焼成は良好。色調は、淡黄橙色。15は、底径は42.2cmの瓦質の大型甕である。胴部は、6~8cmの粘土鉢を輪積み成形にしており、器面の凹凸が著しい。調整は、内外面ともタキ後後に粗いハケ目。

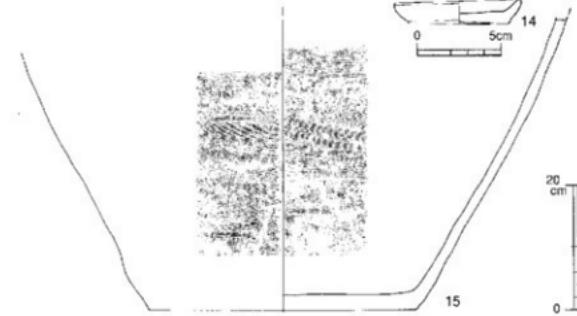


Fig. 20 6号土壌出土遺物実測図 (1/3・1/8)

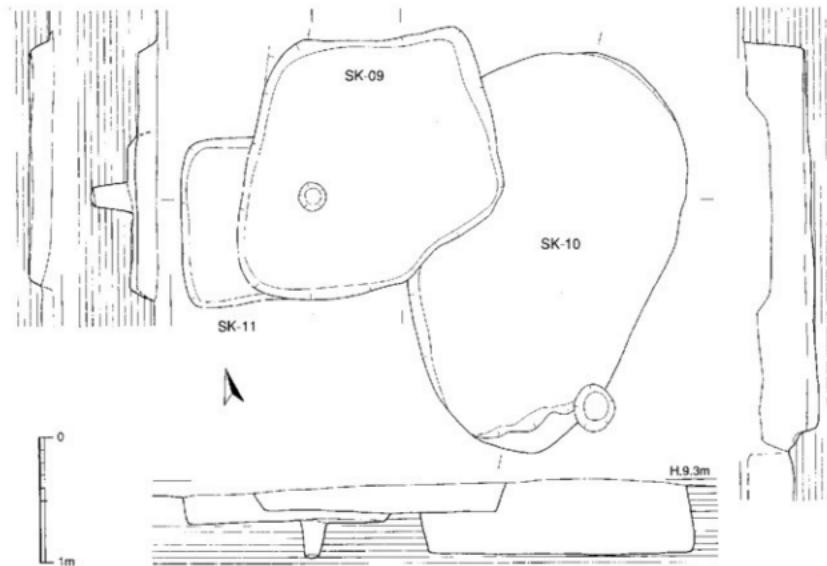


Fig. 21 9・10・11号土壤実測図 (1/40)

8号土壤 SK-08 (Fig.18 PL.10・11)

8号土壤は、調査区の中央部西端にあり、9号土壤のすぐ北に隣接して位置している。平面形は、長軸が183cm、短軸が135cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN-84°一方にとる。壁面は浅く、深さは10~15cmでやや急峻に立ち上がり、床面は平坦である。四壁下には、深さ2~4cmの浅い溝状の窪みが10~30cmの幅で巡り、断面形は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗茶褐色土の単一層で、遺物は1点も出土しなかった。

9号土壤 SK-09 (Fig.21 PL.10)

9号土壤は、調査区の中央部西端に位置する。南東壁側は10号土壤と、また南西壁側は11号土壤と重複しており、その中でもっとも新しい土壤である。平面形は、東西長が220cm、南北長が210cmのやや不整形な方形プランを呈する。

壁高が10~15cmの壁面は、やや急峻に立ち上がる。床面は平坦であるが、中央部は浅く凹レンズ状に窪んでいる。覆土は、茶~暗茶褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

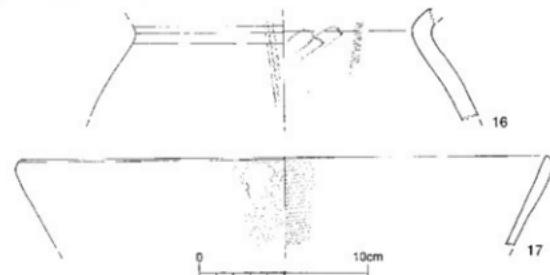


Fig. 22 10号土壤出土遺物実測図 (1/3)

10号土壤 SK-10 (Fig.21 PL.10・11)

10号土壤は、調査区の中央部西端に位置する大型の土壤で、西壁の上縁は9号土壤に削平されている。平面形は、長軸が320cm、短軸が210cmの小判型の楕円形プランをなし、N-22°-Eに主軸方位をとる。壁面はほぼ垂直に立ちあがり、東壁から北壁側は、袋状に小さく膨らむ。壁高は40~45cmで、平坦な床面は、中央部が浅く凹レンズ状に窪む。北西壁側の床面上には、小児頭大の焼けた角礫が点在していた。覆土は、床面上に15cmの厚さで黒色土の混入した粘質の褐灰色土が堆積し、その上層には層厚30cmの灰褐色土の混入した軟質の明黄褐色粘土ブロック層が堆積していた。さらに最上層には灰黒色土混じりの明黄褐色粘土ブロック層が10cmの厚さに固く堆積していた。

出土遺物 (Fig.22)

16は、口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡橙色。17は、土師質の土鍋で、口径は30cm。内外面ともにハケ目調整で、外面には煤が多量に付着している。胎土には石英砂と雲母粒を含み、焼成は良好。色調は明橙色。

11号土壤 SK-11 (Fig.21 PL.10)

11号土壤は、調査区の中央部の西側に位置し、東壁側は9号土壤によって大きく削平されている。平面形は、長軸が165cm、短軸が130cmの長方形プランをなす。深さは20cmで、壁面はやや急峻に立ち上がる。底は平坦で、断面形は箱形をなしている。主軸方位はN-83°-Wにとる。覆土は粘土粒の混入した茶褐色土で、遺物は出土していない。

4) 溝遺構 (SD)

溝遺構は、すべてで5条を検出した。分布的には、調査区の東辺と南辺部にまとまって拡がる傾向が窺える。このうち2条(SD-12・13)は、比較的溝幅が狭くて浅い小溝的なもので、その方向も規格性がなく、開削時の目的や機能については判然としない。これに対して、調査区の東辺と南辺に位置する1号溝(SD-01)と5号溝(SD-05)の2条は、溝幅が2m余りの堀状の大溝で、その配置も「T」字状に直交する位置にある。更に、その間には5mほどの通路状の空間域があり、その開削期と機能は一考の余地がある。

1号溝 SD-01

(Fig.15・23 PL.12)

1号溝は、調査区の東辺に位置する南北方向の溝で、溝底のレヴェルは北方にむかってやや低くなっている。溝幅は130~220cmで、中央部はやや幅狭くなっている。長さは現長で21mを測る。深さは100~110cm、溝底の幅は30~40cmで、断面形はV字形に近い逆台形をな

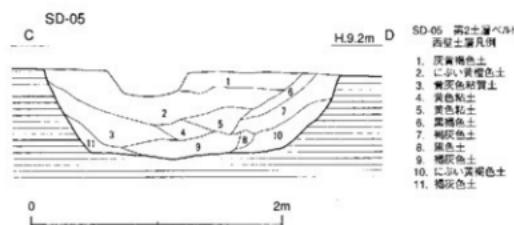
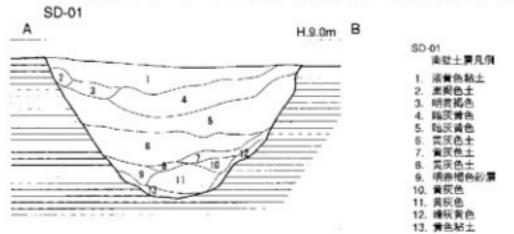


Fig. 23 1・5号溝土層断面図 (1/40)

している。2号溝から東側が削平されていることを加味すれば、本米の深さは2mほどかと考えられる。覆土は、下層には黄灰色粘土層や明赤褐色沙層が凹レンズ状に堆積し、中～上層には暗灰黄色粘土層や明黄黒褐色土層・淡黄色粘土層が堆積していた。遺物は、須恵器や青白磁のほかに肥前系磁器染付である。

出土遺物 (Fig.24)

18は、口径10cmの須恵器壺である。頸部は小さくストレートに外反し、口縁部は大きく曲げて水平に摘み出している。胎土は良質で、灰色。19は、高台径が5cmの青磁碗で、高台は無釉。20は、17世紀前半の肥前磁器。体部には剣先連弁文、見込みには型打成形の菊花文を施文している。高台内は蛇の目釉剥ぎで、チャツ痕がある。21は、玉縁口縁の白磁碗で、口径は11cm。見込みには沈圓線を巡らしている。22は、口径が11.6cmの同安窯系の青磁皿。微砂を含むアイボリーの胎土に灰緑色の透明釉を施釉している。23は、肥前青磁の大皿で高台径は7cm。底面は蛇の目釉剥ぎでチャツ痕がある。高台には鉄錆を喰るが、蓋付の施釉は雑である。24は、長さ19cm、幅15.3cm、厚さが5.7cmの砂岩質の凹石である。中央部に径が4～6cm、深さが6mmほどの浅い窪みがある。

2号溝 SD-02 (Fig.15 PL.7)

2号溝は、調査区東辺にあり、1号溝の西壁に沿って南北方向にのびている。溝幅は50～100cmと蛇行が著しく、深さは40～50cmである。南端が削平によって消失しているが、長さは現長で約20mである。断面形は、浅い舟底状をなし、東壁側は開削時の削平によってその大半が消失している。また、西壁に寄って径が5cmほどの杭が幾本も打ち込まれており、水田に伴う水路の可能性も考えられる。覆土は、粘質を含んだ灰～暗灰褐色土で、溝底には湛水を窺わせる灰黑色粘砂土層が薄く堆積していた。遺物は、近世中～後期の肥前系磁器類が出土している。

出土遺物 (Fig.25・26 PL.14)

25・26は、波佐見窯の磁器染付皿である。25は、高台径が4.4cmで、見込みの蛇の目釉剥ぎには砂目が付着している。疊付は無釉で、内面には二重圓線に格子文を描いている。18世紀中葉～末。26は、口径14cm、高台径8cm、器高は3.3cm。体部には圓線と唐草文、見込みには五弁のコンニャク印判文、

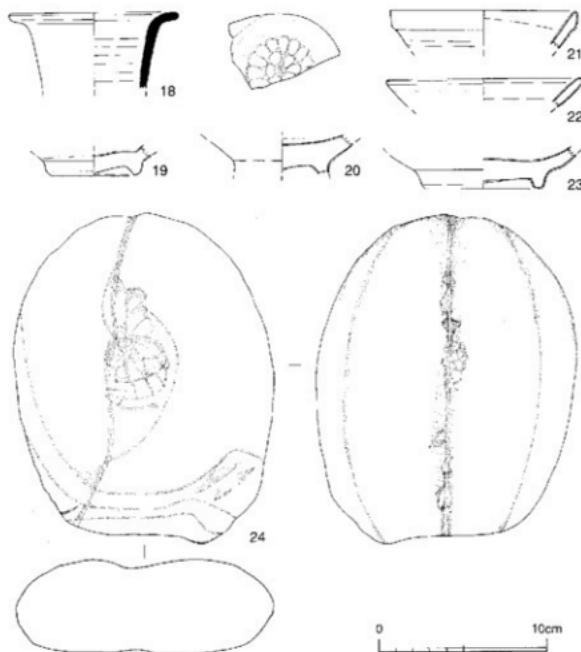


Fig. 24 1号溝出土遺物実測図 (1/3)

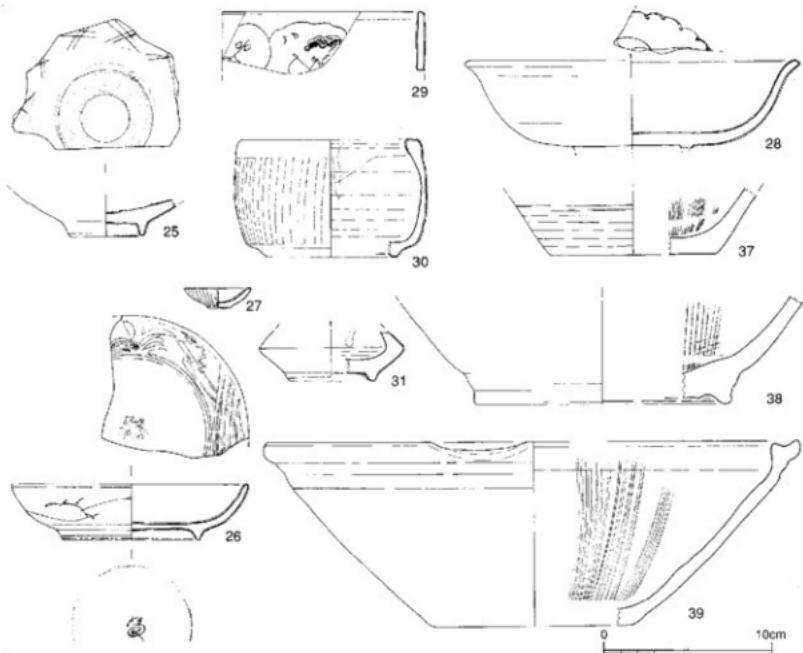


Fig. 25 2号溝出土遺物実測図1 (1/3)

底面には渦巻文を描いている。18世紀末～19世紀前半。27は、肥前白磁の紅皿で、口径は4cm、器高は1.2cm。型押成形で、体部下半は無釉。28は、呉須絵の肥前陶器鉢で、口径は20cm。淡黄色の胎土に透明釉を施釉し、鉄釉で文様を描いている。17世紀後葉～18世紀初め。29は、肥前磁器の染付鉢で、口径は12cm。口縁部は釉剥ぎで、窓絵には淡いブルーで松竹梅に樹下釣人が描かれている。18世紀後半～19世紀前半。30は、口径が10.6cm、器高が6.9cmの肥前磁器香炉である。淡灰青色の釉を施釉しているが、内面と高台内は無釉。18世紀代。31は、高台径が5.2cmの肥前磁器花瓶。灰オリーブ色の釉を施釉しているが、内面は無釉。唇付は釉剥ぎで、内面には砂目が付着している。32は、口径9.2cm、器高が3cmの肥前磁器染付蓋である。外面には呉須で圓線と葉木文、摘み内には「大明年製」銘を描いている。17世紀末から18世紀前葉。33は、口径6cm、器高が4.4cmの染付磁器小碗。釉薬は透明で、釉剥ぎの疊付には砂目が付着している。34～36は、肥前染付磁器碗である。34は、口径10.6cm、器高は5.9cmで、外面には呉須で梅樹文を描いている。35は、口径が10.6cm、器高は5cm。いずれも波佐見窯の「くらわんか碗」で、見込みは蛇の目釉剥ぎ、疊付には砂目が付着している。18世紀中葉～末の産。36は、口径10cm、器高は5.3cmで口縁部下には呉須で雨降り文を描いている。37～39は、陶器壺鉢である。37は、底径が12cmでにぶい橙色の鉄釉を施釉している。見込みには重ね焼きの剥離痕がある。38は、高台径が15cm。明褐色の胎土に鉄釉を施釉し、見込みには重ね焼き時の高台片が貼着している。18世紀後半代の産。39は、口径は32cm、底径は12cmで器高が11cmの片口壺鉢。櫛

書きの摺り目を蜜に施し、口縁部は無釉。胎上は粗砂粒を多く含み、色調はにぶい赤褐色。17世紀後半。40は、口径7.4cm、底径5cm、器高が1cmの土師器小皿である。調整は体部がヨコナデ、内底面はナデ、底部は糸切り。胎土・焼成とも良好で、色調は黄橙色。内面には油煙が付着している。42は、底径は16cm。胴部下端には幅8cm、高さが7.5cmの半円形の通風口があり、その上部には三角形の突起を水平に摘み出している。底部には煤の付着が著しい。瓦質で移動窯か。43は、底径が30.4cmの瓦質の鉢で、円筒状の胴部は小さく外反する。44は、口径6.2cm、高さが5cmの灯明皿の芯立て。胎土には若干の砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は淡橙色。

5号溝 SD-05 (Fig.15-23 PL.10-13)

5号溝は、調査区の南西隅に位置する東西方向の大溝で、その上面には7号建物跡が構築されている。溝幅は2.2m、深さは70~80cm、長さは約9mで楕円状に終息する東端には、更に幅70~100cmの小溝が東へ3.5mほど弧状にのびている。一方、西端は矩形に終息している。深さは70~80cm、底幅

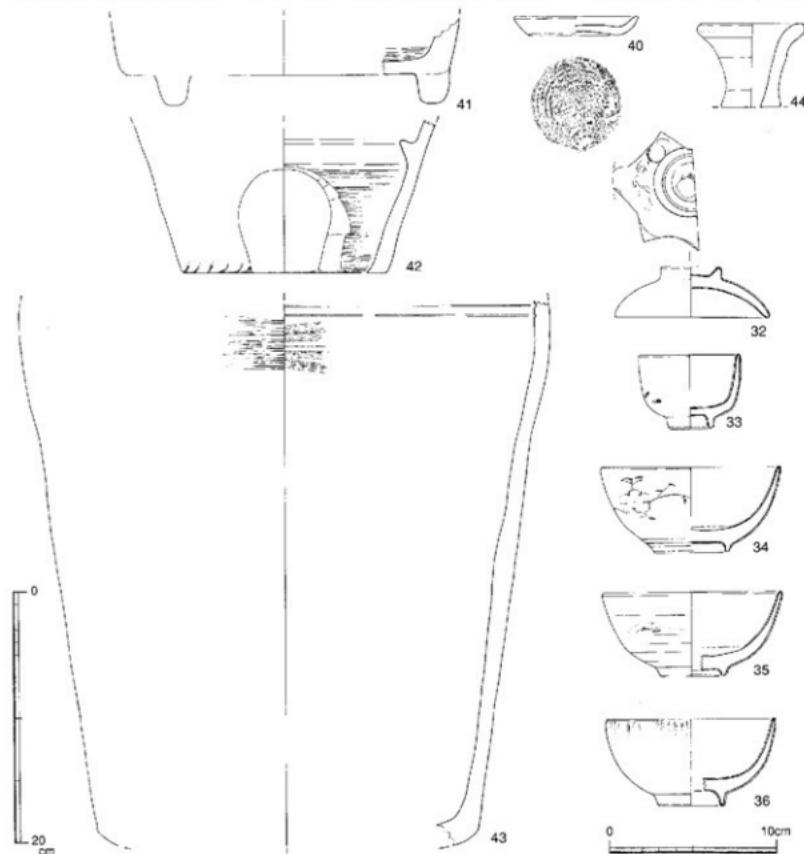


Fig. 26 2号溝出土遺物実測図 2 (1/3 + 1/4)

は140~150cmで箱状の逆台形をなしている。覆土中からは磁器類が出土している。

出土遺物 (Fig.27)

46は、11號の磁器皿で、口径は10.8cmである。見込みと外面には輪線と文様を描いている。基筒底の底部は、径3.8cmを測る。明末の景德鎮窯産のものであろう。45は、口径が10cmの白磁小皿で、口縁部は無釉。中国德化窯産か。47は、肥前染付磁器碗で、高台径は4cm。見込みには「寿」文を書く。高台の脣付は無釉で、砂目が付着している。18世紀中葉～末の産であろう。

12号溝 SD-12 (Fig.15 PL.7)

12号溝は、調査区の南西隅に位置する小溝で、西端部は5号溝によって削平されている。溝幅は40~70cm、深さは20~40cmで断面形は凹レンズ状をなしている。覆土は暗灰褐色土である。

13号溝 SD-13 (Fig.5 PL.7)

13号溝は、調査区の南西端にあり、すぐ北には6号土壙が位置している。溝は、西端が5号溝に、東端が攬乱坑によって削平されており、全容は判然としない。溝幅は50~70cm、深さは20cmで断面形は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は暗灰褐色土で、肥前系磁器類が出土している。

出土遺物 (Fig.28 PL.14)

48は、波佐見窯の染付磁器小皿で、口径が9cm、高台径が4cm、器高は2.5cmである。蛇の目釉剥ぎの見込みには、輪線と絵文を描いている。釉剥ぎの脣付には砂目が付着している。18世紀中葉～末。49は、透明釉の象嵌文皿である。脣付は釉剥ぎで、高台径は3.2cm。見込みには三鳥手と印花文を施文している。胎土はにぶい褐色で、暗赤褐色の釉を施釉している。17世紀前半の産か。50は、波佐見窯の陶器碗で、口径6cm、高台径4.6cm、器高は4.8cm。見込みは蛇の目釉剥ぎ、脣付は釉剥ぎ。暗いオリーブ灰色の釉を施釉している。51は、口径が9.8cm、高台径3cm、器高4.8cmの肥前染付碗である。脣付は釉剥ぎ。18世紀後半～19世紀前半の産。

5) その他の遺構と包含層出土の遺物

調査区には、建物跡や溝のほかに柱穴が検出された。また、東側の段落ち部の上層には茶褐色の遺物包含層が薄く堆積していた。この遺物包含層やピットから中～近世の陶磁器類が出土しているが、包埋される遺物は少ない。

出土遺物 (Fig.29 PL.14)

52は、波佐見窯の染付磁器小皿で、口径は10cm、高台径4.4cm、器高は2.2cmである。見込みは蛇の目釉剥ぎで、輪線と文様をコバルトブルーの呉須で描いている。脣付は釉剥ぎ。18世紀末～19世紀前半。53は、肥前染付皿で、口径11.2cm、高台径6.4cm、器高は2.7cmである。蛇の目凹型高台は、釉剥ぎ。見込みに濃淡のあるコバルトブルーの呉須で山水文を描き、4ヶ所に針支え痕がある。18世紀代。54は、肥前の色絵染付蓋で、口径は10cm。白磁胎

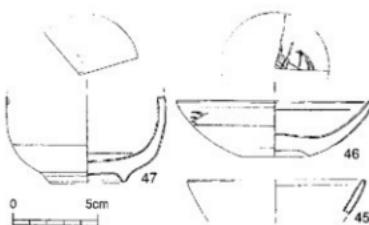


Fig. 27 5号溝出土遺物実測図 (1/3)

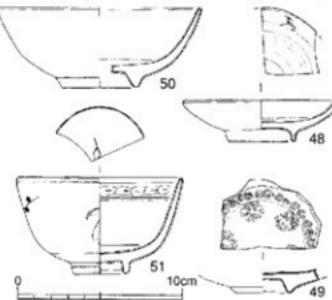


Fig. 28 13号溝出土遺物実測図 (1/3)

に透明釉を施釉しているが、口縁部は無釉で砂目が付着している。外面にはコバルトブルーの園線に赤褐色の菱形文を線描きしている。17世紀後半～18世紀前半のもの。55は、11㌢が8㌢の畿内系灰釉磁器小碗である。明緑色の釉薬を施釉しているが、全体にやや大きめの貫入が観られる。19世紀前半の産。56は、高台径が7㌢の肥前系鉄釉陶器壺で、高台部は無釉である。57は、ロクロ成形の陶器瓶で、底径は6.4㌢を測る。褐色の胎土に透明釉を施釉している。18世紀後半のもの。58は、底径が2.4㌢の瓦質壺である。肉厚の胴部は円筒形をなしている。色調は内面が黒色、外表面は淡褐色～赤褐色を呈する。

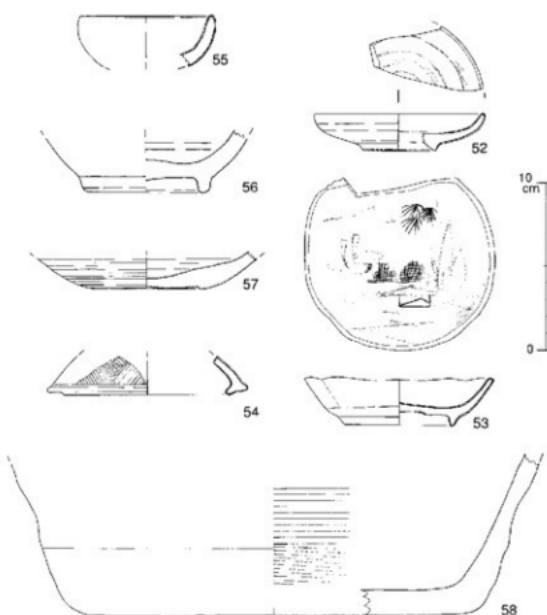


Fig. 29 包含層出土遺物実測図 (1/3)

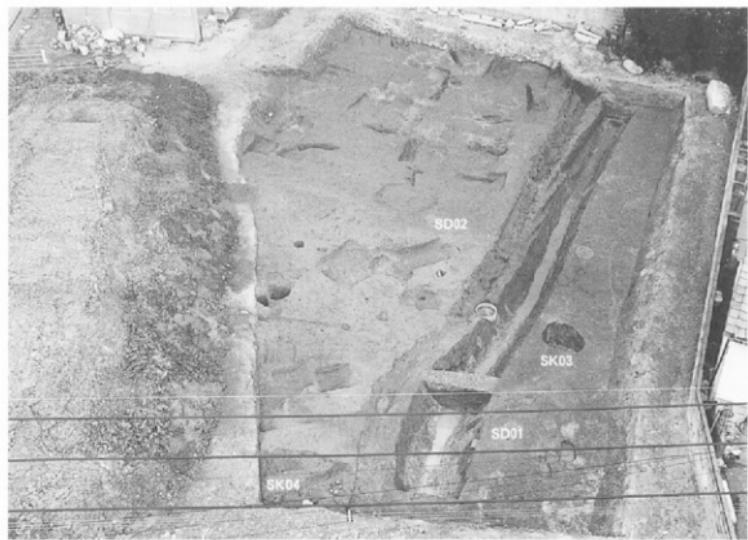
4. 小 結

五十川遺跡群の第7次調査では、堀状の大溝や雨落ち溝を伴った建物跡などを検出したが、10号土壙など幾つかを除いてほとんどが近世期の遺構群であった。殊に、1号溝(SD-01)と5号溝(SD-05)の2条の人溝は、近世に比定され、近世後半まで機能していたものと考えられる。この両溝は、5号溝の東端が1号溝に直交するような「T」字状の配置を示し、その間には5mほどの通路状の空間がある。両溝の全容が明らかでない今、その機能や規模について判断はできないが、相応の居宅を囲む堀状の大溝、あるいは集落域の外縁に巡る大溝と推測するのが容易である。このことは今に残る地名からも推し量ることができる。南北にのびる五十川遺跡群の北半部には「下屋敷、上屋敷」、南半部には「横枕、宮前、後田」と云う字名(Fig. 3)が残り、第5～8次調査区は「上屋敷」内に位置している。また、那珂川に面した西は「下河原、中河原、上河原」、第7次調査区の北に湾入する谷部には「草場口」の字名があり、この谷奥を境として北の「下屋敷」と南の「上屋敷」に分かれている。短絡的ながら少ない調査データと地名から推し量ると、五十川の低丘陵上には堀状の大溝を巡らす居宅域があり、通路口が第7次調査区北の谷合からのがていた可能性が考えられる。東方に残る「東ノ坪、中ノ坪、八畝町」の字名が条里に起因するのに対して、「上・下屋敷」や「草場口」の字名は、これらの遺構に因ると考えるのが理解しやすかろう。ただし、居宅地の四隅に大溝を巡らす必然性がこの時代にあったか否かが疑問視されるが、調査データの集積を待って再検討したい。

PL. 7



(1) 第7次調査区東側全景（南より）



(2) 第7次調査区西側全景（南より）



(1) 第7次調査区7号建物跡全景（北より）



(2) 第7次調査区7号建物跡南溝遺物出土状況（北より）

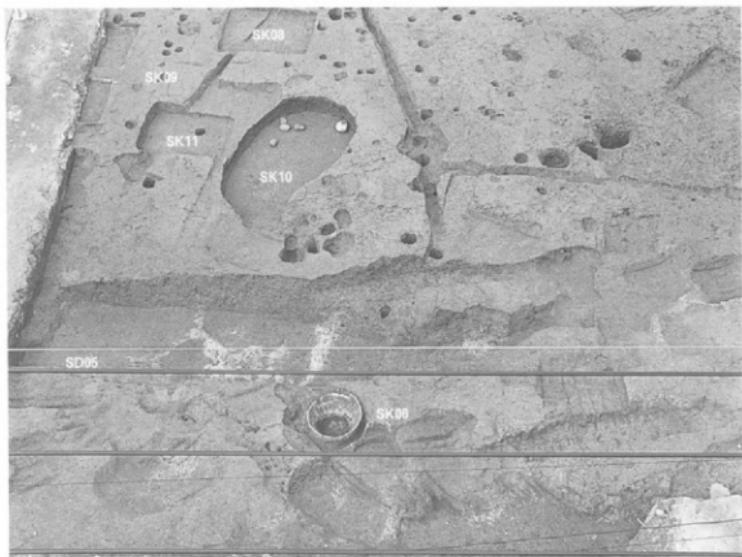
PL. 9



(1) 第7次調査区3号土壤全景（北より）



(2) 第7次調査区4号土壤（南より）



(1) 第7次調査区5号溝・4・6～8号土壤全景（南より）



(2) 第7次調査区9～11号土壤全景（南より）

PL.11



(1) 第7次調査区8号土壤全景(西より)



(2) 第7次調査区10号土壤全景(北より)



(1) 第7次調査区 1号溝全景（南より）

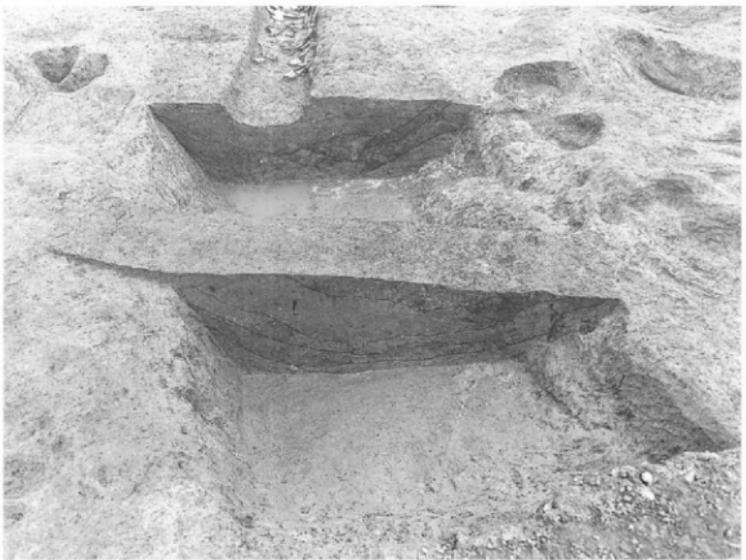


(2) 第7次調査区 1号溝南壁土層断面（南より）

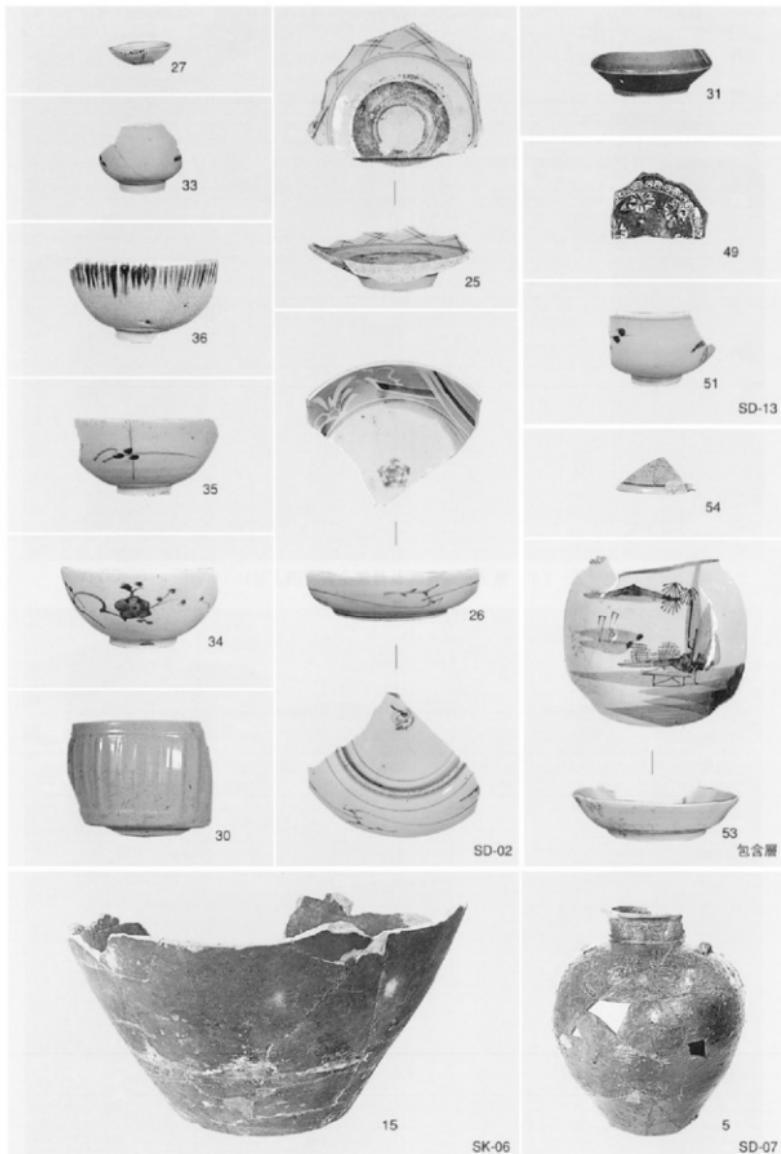
PL.13



(1) 第7次調査区5号溝全景（西より）



(2) 第7次調査区5号溝西壁土層断面（西より）



第7次調査区出土遺物 (1/3・1/8・1/12)

V. 第8次調査の記録

1. 調査にいたる経過

第8次調査区は、五十川二丁目555に位置し、平成10(1998)年9月22日に地権者の秋田昇氏より専用住宅の建設に先立って埋蔵文化財の有無確認の事前審査願いが申請された。申請地は、五十川遺跡群内にあり、遺構の存在が予想されることから、平成10(1998)年10月8日に遺構確認の試掘調査を実施



Fig. 30 第5・8次調査区位置図 (1/500)

した。その結果、表土下45cmで土壤や柱穴が掘り込まれた鳥栖ローム層を検出し、その上面には土師器や須恵器片を包藏する厚さ20cmの暗茶褐色土層が堆積していた。これを基に協議を行った結果、計画されている住宅の設計案は比較的基礎が浅く、盛土をして現状保存を図った。しかし、市道に供用されるセットバック部については、破壊を免れないために造構の確認調査を実施することとなり、第7次調査区の担当班が発掘調査終了後に調査に当たることになった。

発掘調査は、西面する道路に沿って長さ13mの調査区をトレンチ状に設定して実施した。調査は、平成10(1998)年11月6日から始め、11月10日に終了したが、重機の稼働が困難なために表土層の除去から埋め戻しまでの全行程を人力で行った。

2. 調査体制

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男 第2係長 力武卓治 山口謙治(前任)

調査庶務 文化財整備課長 上村忠明 御手洗清 谷口真由美(前任)

調査担当 埋蔵文化財課第2係 小林義彦

調査・整理作業 有田恵子 石川洋子 石橋陽子 泉本タミ子 今村ひろ

子 大瀬良直哉 金子二三枝 木村文子 幸田信乃 古賀典子 鳩ヒサ子

大司夏子 田中トミ子 塚本よし子 鍋山治子 西田文子 福場真由美

北条こず江 三栗野明美 持丸玲子 森田祐子 山田政治

3. 調査の記録

1) 調査の概要

五十川遺跡群は、那珂川右岸にのびる春日丘陵の北寄りに位置し、谷を隔てた南側には春日丘陵から続く井戸遺跡群があり、北側には那珂・比恵遺跡群が繋がっている。第8次調査区は、この五十川遺跡群中央部の丘陵裾が緩やかに内湾する東端寄りに位置し、北東方100mの距離には第7次調査区が、また南へ110mの距離には第5次調査区が位置している。

発掘調査は、市道に沿って幅1.5m、長さ13mのトレンチ状に実施し、土壤や建物跡の可能性がある柱穴群を検出したが、全容の把握には至っていない。なお、表土層の除去や埋め戻しは、すべて人力で行った。発掘作業に従事した人々の労苦に改めて感謝します。

2) 土 壤 (SK)

土壤は、トレンチ状の調査区の北寄りで1基を検出したが、分布やプランおよび時期的な傾向を十分に把握することは出来ず、その存在を確認するにとどまった。

1号土壤 SK-01 (Fig.32 PL.15)

1号土壤は、トレンチの北寄りに位置し、北西隅壁は建

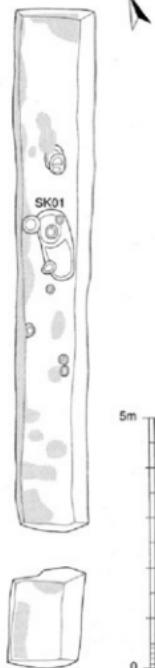


Fig. 31 第8次調査区
遺構配置図 (1/100)

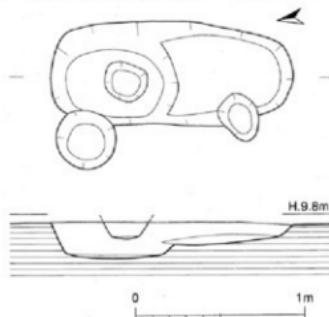


Fig. 32 1号土壤実測図 (1/30)

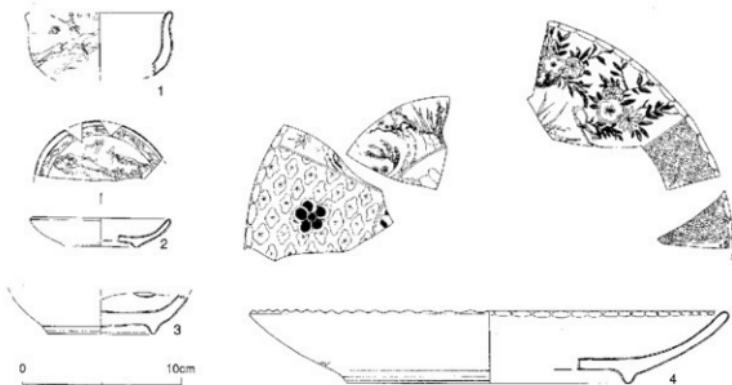


Fig. 33 包含層出土遺物実測図 (1/3)

物跡かと思われる柱穴に切られている。平面形は、長軸が143cm、短軸が62cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-E°～E°にとる。壁面は10～13cmと浅く、緩やかに立ち上がる。底面は、浅い舟底状をなし、その北半部は、10cmほど円レンズ状に窪んだ2段掘りの構造をなしている。覆土は、固く縮まった暗褐色土で、黄褐色粘土ブロックが混入していた。

3) その他の遺構と包含層出土の遺物

調査区では、土壤のほかに9基のピットが検出された。このうち1号土壤の北西隔壁を切る径35cm、深さ37cmのピットと1.8m南に位置する径28cm、深さ32cmのピットは覆土等が酷似しており、掘立柱建物跡の柱穴の可能性も十分に考えられるが、詳細は判然としない。仮に、建物跡とした時の柱間は2.1mで、東西棟の建物跡が考えられよう。また、黄褐色粘土層上には、暗褐色～暗茶褐色の遺物包含層が約10cmの厚さで薄く堆積していたが、包蔵される遺物は少ない。

出土遺物 (Fig.33)

1は、口径が8.8cmの陶器碗である。体部はやや肉厚で、扁平な半球形をなす。口縁部は、直口する体部上縁から小さく屈曲して、短く外反する。外面は、赤褐色の釉薬に黒い釉薬を化粧掛けに施釉して桜花と枝を描いている。内面は、灰白色。胎土は精緻。2は、口径が8.6cm、高台径4.4cm、器高が1.8cmの肥前の染付磁器小皿である。口縁部は、濃茶褐色釉を施釉し、内縁には連続した梅花唐草文を、見込みには雲竜文を描いている。胎土は精緻で、焼成は堅緻。17世紀後半の窯であろう。3は、高台径が6.4cmの肥前系染付皿で、18世紀代の窯であろう。乳白色に施釉し、コバルトブルーの呉須で施文している。置付けは釉剥ぎ。4は、口径が29cm、高台径が17.4cm、器高が4.5cmの輪花形大皿である。口縁部は口銚で、内面には菊格子文の中に梅花、梅花地文の中に梅花、梅の枝折文、山水文等が描かれている。また、見込みには、型紙擺りの線描文内に草花文を描いている。胎土は精緻で、焼成は堅緻である。18世紀前半期の肥前有田の窯であろう。

4. 小 結

第8次調査区は、市道供用に伴うトレンチ調査にすぎず、試掘調査の成果と併せてても詳細は明らかではない。しかし、掘立柱建物跡を示唆する柱穴もあり、隣接する第5次調査区例を含めて建物跡を主要要素とする集落城が拡がっていた可能性も考えられる。



(1) 第8次調査区全景(南より)



(2) 第8次調査区1号土壤全景(西より)

五十川遺跡

—第5・6・7・8次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第720集

2002年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会
印刷 松古堂印刷㈱

